

財 団 法 人 東 洋 文 庫 年 報

昭 和 54 年 度

財 団 法 人 東 洋 文 庫

財団法人 東洋文庫年報 昭和54年度

目 次

I 昭和54年度の東洋文庫	3
II 図書事業	5
1. 図書の収集・整理と閲覧	5
2. 図書資料の整理と閲覧	5
3. 資料複製増刷サービス	7
4. 展示会	7
III 研究事業	8
1. 調査研究	8
i 文部省科学研究費による調査研究	8
ii 一般調査研究	10
iii 特別調査研究	13
iv 研究委員会	14
2. 学術図書出版	15
3. 講演会	15
4. 展示会	16
5. 研究会	16
6. 研究者養成	16
7. 国内・国外研究者への便宜供与	17
8. 職員の研究業績	17
IV 業務報告	28
1. 庶務報告	28

2. 人 事 報 告	29
3. 会 計 報 告	31
V 役 職 員 名 簿	41
1. 役 員	41
2. 東洋学連絡委員会委員	42
3. 名 誉 研 究 員	42
4. 職 員	43
5. 臨 時 職 員	45
VI 東洋文庫維持会	46
VII 財団法人東洋文庫附置	
ユネスコ東アジア文化研究センター事業	47
1. 調査研究事業	47
2. 学術交流及び普及、ドキュメンテーション活動	50
3. 出版物の作成	53
4. 業 務 報 告	55
5. 役 職 員 名 簿	59

I 昭和54年度の東洋文庫

昨53年度末（3月15日）の研究員金子良太氏の急逝に続いて、図書部の木村龍生氏（4月19日）、東洋学連絡委員会委員として尽力せられた早稲田大学教授 栗原朋信氏（9月2日）、内地研究員として東洋文庫で研究を開始しようとしていた金沢大学法文学部の助手前田恵美子氏（10月14日）が次々に逝去せられた。そして9月24日、かねて横浜市港南区下永谷町の国立療養所南横浜病院に入って療養中であった理事長辻直四郎博士が世を去られたのである。

博士は東京の人。旧姓は福島。明治32（1899）年11月18日に生まれ、東京府立第一中学校・第一高等学校（文科）を経て、大正12年3月、東京帝国大学文学部言語学科を卒業、直ちに同文学部副手を命ぜられ、翌大正13年3月、梵語及び梵文学研究のため渡欧、大正14年11月、文部省在外研究員を命ぜられ、昭和2（1927）年4月15日帰朝した。

帰朝と同日附で東京帝国大学文学部講師を嘱託せられ、梵語及び梵文学講座に関する職務を担任、10日後の昭和2年4月25日、東京帝国大学助教授に任ぜられ、梵語梵文学講座を担任、昭和17（1942）年、東京帝国大学教授に昇任、昭和35（1960）年4月1日、定年申合せにより退官した。

この間、東京大学評議員たること3回（昭和22年4月、28年3月、34年3月）、文学部長たること2期（25年3月—28年3月）、東洋文化研究所長（28年4月—29年3月）に続いて教養学部長（29年1月、31年4月）及び大学人文学研究科委員会委員長（28年5月—32年5月）たることそれぞれ2期、更に東京大学内外の各種の委員会・審議会・商議会・協議会の委員を兼任した。

東京大学を退かれてからは、慶応大学語学研究所（昭和37年7月1日、言語文化研究所と改称）教授（35年4月—40年10月）、ユネスコ東アジア文化研究センター所長（36年7月—49年3月）、国立国会図書館支部東洋文庫長（40年11月—49年3月）、慶応義塾大学言語文化研究所顧問（46年10月以降）、財団法人東洋文庫理事長（49年4月以降）に歴任、同時に鈴木学術財団・日仏会館等国内の学術関係の諸機関諸団体の役員を兼ねた。

一方、昭和18年4月15日、かねて提出していた学位請求論文により文学博士の学位を授与せられ、28年10月22日、日本学士院会員に列せられたほか、英国学士院会員を始めとするいくつかの外国の学会の会員及び国際学会の会長或いは副会長の任につかれた。そして昭和53年11月3日、文化功労者に選定せられた。文化功労者の選定がどのような標準で行われるのか知る由もないが、晩きに失したとは言え、選定委員の諸公

が辻博士の研究とその業績との質の高さに思い至ったことは、同慶の至りである。

博士が東京大学で担当せられたのは梵語及び梵文学の講座であるが、博士の研究はいわゆる印欧語比較言語学についての広い、深い知識を背景にしたサンスクリット語とサンスクリット文学との研究であって、その主力はヴェーダの解明であった。博士は19世紀以来ヨーロッパに発達して来た関連の研究を余すところなく吸収し、現時点における最新最高の水準に立って、ヴェーダの意味する所を明かにしようと力められた。専門研究に関する博士の蔵書約2万冊。凡そヴェーダと印欧語比較言語学とに関係ある資料と研究とは尽くこれを網羅して余す所無いに近い。博士の逝去の後、これらの蔵書はすべて東洋文庫に寄贈せられたが、いずれも博士の手ずれの痕を止め、見る者をして徹せずんば已まざる博士の不退転の気魄を感じしめる。

生前、博士の書斎でベートリンク編のパーニニの文典を見たことがある。それは茶色の皮で堅牢に装幀されたものであるが、度重なる利用で表紙は毛ば立ち、しかも表紙の一方はとれてしまっているのである。なにかの機会にこのことを申し上げたら、「あれは3冊目だ」と言って居られた。正に韋編三たび絶つである。最晩年、博士は鈴木学術財団研究年報の第7号（1968—70年）から第14号（1977年）に至る8号に、「紙魚のはこ」と題してインド学関係の欧文・梵文の新刊書の書評を掲げられたことがある。採上げられた書物の総数は346種。右の年報の第15号にはその書名・著者名の索引が18頁に亘って掲げられている。勿論、それ以外にも多くの書評・論文・著書の類が公にされているのであるが、仮に「紙魚のはこ」だけについて見ても、8年間に346種と言えば、年平均43種強に当る。しかもこれは博士が病に苦しんで居られた時のことである。その博士が強健であった時に2万冊に近い専門書を読破せられたとしても、何等不思議はない。

博士は明敏人に過ぎる人であった。東京大学に在職した33年の半ばに近い期間を評議員・学部長・研究所長その他各種の委員として大学の行政に尽瘁せられ、大きな業績を挙げられた。しかし、大学は学問の蘊奥を極める筈の所であって、行政事務の手腕を磨く場所ではない。その東京大学が辻博士のような才能と学力と、必要な図書を出るに従って購入出来る財力とに恵まれた学者の時間と精力との大半を事務処理に徒消せしめたのは、何とも残念なことである。これによって日本のインド古代の研究や中央アジア史の研究は大いに遅れてしまったのである。

博士に東洋文庫に来て頂き、ユネスコ東アジア文化研究センター所長・国立国会図書館支部東洋文庫文庫長・財団法人東洋文庫理事長として御協力をお願いしたのは、せめて先生に多少でも静かな研究の時間を持って頂きたいという念願も籠められていたのである。

辻理事長今や亡し。しかし学問の化神のような先生は、白鳥庫吉・和田清両博士と同じく、永く東洋文庫のみならず、日本の東洋学界の明星として後進に行くべき道を示して下さいて下さることであろう。

II 図書事業

1. 図書の収集・整理と閲覧

購入・交換・受贈によって収集した資料は、一般文献資料のほか、特に中央アジア特別研究資料・東アジア特別研究資料・西アジア特別研究資料があり、昭和54年度末現在の蔵書数は604,082冊となった。

・資料購入

	和 漢 書	洋 書	複写資料	計
一 般 文 献 資 料	131	83	0	214
中央アジア特別研究資料	0	472	3	475
東アジア特別研究資料	969	108	77	1,154
西アジア特別研究資料	0	481	0	481
計	1,100冊	1,144冊	80リール	2,324点

・資料交換

	受 贈			寄 贈		
	和 漢 書	洋 書	計	国 内	国 外	計
単 行 本	1,550	232	1,782	1,647	988	2,635
定期刊行物	2,610	1,154	3,764	370	313	683
計	4,160	1,386	5,546冊	2,017	1,301	3,318冊

2. 図書資料の整理と閲覧

・製本数量

本年度の製本施工数量は下記の通りである。

	単 行 本	定期刊行物	複写資料製本	複写資料製帙	そ の 他
数量（冊）	52	346	1,031	581	302

・図 書 利 用 状 況

本年度の所蔵図書の利用状況ならびに内訳は次の通りであった。

月	開館日数	閲覧者数	一日平均	昨年同月 との比 (△印は減)	閱 覧 数 図 書 数	一日平均	昨年同月 との比 (△印は減)
	日	人	人	人	冊	冊	冊
4	23	242	11弱	△ 76	3,282	143弱	△1,773
5	24	375	16弱	△104	5,068	211強	△ 242
6	25	342	14弱	△118	4,733	189強	△1,994
7	25	403	16強	△105	5,164	207弱	△1,596
8	26	430	18強	△142	7,794	299	733
9	22	329	15弱	△200	3,862	176弱	△3,380
10	24	418	18弱	△ 96	5,119	172弱	△1,201
11	22	418	19	△ 6	5,460	248強	△ 515
12	22	364	17弱	△ 50	5,499	250弱	395
1	21	239	12強	△ 30	4,642	221強	280
2	23	280	12強	△ 7	4,098	178強	△ 612
3	24	379	16弱	44	6,807	285弱	2,089
計	281	4,219			61,528		

・閲覧図書数内訳

月	和 書		漢 書		洋 書		合 計	
	部 数	冊 数	部 数	冊 数	部 数	冊 数	部 数	冊 数
4	192	385	466	2,696	153	201	811	3,282
5	250	496	587	4,036	310	536	1,147	5,068
6	236	519	478	3,641	238	573	952	4,733
7	356	495	698	4,052	359	617	1,413	5,164
8	330	817	1,069	6,545	253	432	1,652	7,794
9	233	447	579	3,072	214	343	1,026	3,862
10	371	533	736	4,248	290	338	1,397	5,119
11	365	452	787	4,469	305	539	1,457	5,460
12	270	401	687	4,614	204	484	1,161	5,499
1	165	329	561	3,979	157	334	883	4,642
2	233	454	544	3,246	231	398	1,008	4,098
3	257	587	726	5,513	406	707	1,389	6,807
計	3,258	5,915	7,918	50,111	3,120	5,502	14,296	61,528

3. 資料複製増刷サービス

国内外の研究者・研究機関の閲覧・利用の便に供するために行なったもので、実績は下記の通りであった。

・マイクロ・フィルム

申込件数	撮影駒数	焼付引伸枚数	ポジ・フィルム
947	168,634	164,592	98,667

・電子複写

申込件数	撮影枚数
1,400	107,426

4. 展示会

第62回東洋文庫展示会

期日：昭和54年12月1日(土)～2日(日)

場所：東洋文庫閲覧室

展示書

洋書 一兩年中物故欧人東洋学者の遺著

(ボムバーチ、ボイル、キードル、ドミエヴィル、フックス、アムビス、カールグレンの7氏の著作目録を掲げ、特に重要なものの若干を展示した)。

漢書 明清善本

(特に清朝の殷版に重点をおき、版式の見事なもの7点を展示)

国書 五山版と江戸期自筆本

(第1部は五山版とその原本の中国刊本を併置、第2部の江戸期自筆本は、曾槲の書8種、傾城水滸伝等を展示)

展示会目録(B5版、i+32頁)を作成配布した。

Ⅲ 研究事業

1. 調査研究

調査研究は、文部省科学研究費補助金によるものと、文部省民間学術研究機関補助金による一般・特別調査研究とに分かれる。

i 文部省科学研究費による調査研究

一般研究(A)

【課題】 中国を中心とする東アジア国際関係史資料の書誌的研究

【期間】 昭和54年度（3ヶ年継続事業最終年度）

【目的】 東アジアにおける現代の国際情勢を理解するために、東アジア近代国際関係史の研究に必要な外交文書、新聞、雑誌、その他の関係資料を収集・整理し、これら資料の書誌的研究を行ない、収集資料ならびに研究成果を公開公表して、国内外における国際関係史の研究を推進することを目的とする。

【事業】 昭和52年度、53年度、54年度の3ヶ年計画により購入した本事業の関係資料について、その史料的价值を考察した主要なものは以下の通りである。

(1)外交文書関係資料

Foreign Office General Correspondence (1815～1905年, 790リール), American Diplomatic and Public papers; The United States and China (1842～1893年, 38冊)等の対東アジア関係外交文書集。

(2)中国で発行された新聞

英文・Ostasiatische Lloyd; Shanghai (1891—1915, 36～41年, 34リール), 独文・Der Ostasiatische Lloyd (1891—1915, 36～41年等6種), 中文・解放日報(1941年5月16～1947年3月27日)等。

(3)雑誌及びその他関係資料

Missionary Periodicals from the China Mainland (20世紀前半, 10種35リール), 日本の紡績業界誌(19世紀後半～20世紀前半, 4種106リール), The Hoover Institution 所蔵中共関係資料(110リール)「近代中国史料叢刊続編」 「民国二十年代中国大陸土地問題資料」等。

以上、購入した資料は、その史料的价值の確定についてひきつづき検討中であるが、いずれもカード目録を作成し、広く一般の研究者も利用できるように準

備した。

【代表者】 榎 一雄

【分担者】 統括：榎 一雄

社会・文化班：榎 一雄，神田信夫

法と政治班：坂野正高，滋賀秀三

経済班：山根幸夫，田中正俊

資料収集・整理班：本庄比佐子

総 合 研 究 (A) — [原田(辻) 班]

【課題】 仏典翻訳の対照意味論の研究

【期間】 昭和54年度（3ヶ年継続事業第2年度）

【目的】 本研究は、漢語(漢)、チベット語(蔵)、西夏語(西夏)、ウイグル語(回)、モンゴル語(蒙)、満洲語(満)、朝鮮語(朝)の翻訳仏典における仏教用語を主たる対象として、それらの文化的語彙が一言語から、異なる文化を担い、異なる語彙体系をもつ他の言語へとどのように翻訳されたかを文法構造等との関連において、対照意味論的に分析・研究（テキストとして「法華経普門品観音経」を選定した）して、上記諸言語及びサンスクリット語(梵)それぞれの意味的構造の特徴の一端を明らかにすると同時に、言語接触ひいては文化接触における干渉の様態に関する研究、さらには個々の翻訳仏典の推定等に関する文献学的研究に、基礎的資料を提供することを目的とする。

【事業】 (1)前年度にひきつづき、従来の上記8言語相互間の仏教用語対訳語彙集、及びそれらについての研究文献を収集、整備した。

(2)前年度において、ケース・スタディの対象として選定した「法華経普門品観音経」の上記8言語のテキストについて、その対照表を梵・漢、梵・蔵、漢・朝、蒙・満等7グループごとそれぞれに検討し、さらに上記經典所載の仏教用語のなかから、本研究において重点的に分析の対象とする用語（如来、世尊、菩薩、摩訶薩、観音・観自在、有情・衆生、般若波羅密）を選定した。

(3)上記7グループについて、それぞれ2言語間対照仏教用語用例集を作成し、各言語の文法構造との関連において対照意味論的に分析を進めた。

【代表者】 原田 覚（故辻直四郎）

【分担者】 統括・チベット語・仏教学：原田 覚

チベット語：北村 甫

チベット語：サンスクリット語：山口瑞鳳

漢語・仏教学：金岡照光

西夏語・漢語：西田龍雄

ウイグル語：護 雅夫，庄垣内正弘

朝鮮語・漢語：河野六郎，大江孝男

蒙古語・満州語：岡田英弘

総合研究(A)―〔田川 班〕

【課題】 李朝に於ける地方自治組織並びに農村社会経済語彙の研究

【期間】 昭和54年度（2ヶ年継続事業最終年度）

【目的】 本研究は，朝鮮李朝農村の社会的，政治的研究を目指すものである。

従って，従来の調査により明らかとなった土族自治の組織の活動，及びその歴史的質的変遷の調査を深めると共に，土族郷任と，そのもとに階層的に存在した郷吏，庶民，官奴碑の官属としての職役の実情を明らかにし，併せて国法の外に地域毎に行われた自治的慣習法としての諸税法，及び雑役即ち勞役の内容を究明することを目的とする。また，以上の問題と併行して，法制用語の外に，地域農村社会に使用された慣習法上の用語，農村語彙等の意義を闡明しようとするものである。

【事業】 (1)本研究の目的に沿って，前年度にひきつづき本年度の調査は，17世紀以降，土族自治組織及び郷庁，官属を中心として展開する次の諸問題について行なった。

その1は，自治組織の変動変質について，その2は，政府の収奪の激化について，3には，徴税，上納輸送事務のため，各邑が政庁組織の拡大増設，職人の増員を行なったことについて，4には，18世紀以降とくに顕著となった社会身分制の混乱について，研究会等を通じて詳細な検討を加えた。

(2)本年度の史料収集は，前年度の残余分に止まり，併せて総数316部，793冊となった。その略目録は研究成果報告書に収録したが，詳細な書誌の調査についてはなお継続して行なうこととした。なお，収集した資料は，広く一般の研究者も利用できるようにした。

【代表者】 田川孝三

【分担者】 統括・農村社会経済語彙の研究：田川孝三

地方財政・地方行政組織の研究：末松保和，田川孝三，武田幸男

長 正統，北村秀人，平木 實

農村社会経済語彙の蒐集とその言語学的研究：田川孝三，中村完，藤本幸夫
菅野裕臣，志部昭平

ii 一般調査研究

(本年度は，特に，宋代史研究委員会，清代史(満・蒙)研究委員会を中心に調査研究を行なった。)

東亜考古学研究委員会

【資料の整理】 梅原末治評議員（京都大学名誉教授）の寄贈にかかる東亜考古学資料（写真，実測図，拓本，野帖等）の整理とその目録の作成。（特に，日本の部を含む東亜の部の青銅器資料の整理とその目録の作成を行う。）（前年度の継続）（作成中）

古代史研究委員会

【資料の整理・編集】 東洋文庫所蔵中国画像名，造像名，墓碑銘等拓本の研究整理。

唐代史研究委員会

【資料の収集・整理・研究及び情報提供】 (1)国内国外に現存する西域出土古文書の所在調査と，マイクロ・フィルムによるその収集・整理。

(2)内外の諸機関，研究者に対する既収集敦煌文献資料の公開，情報の提供

(3)敦煌吐魯番等漢文文献による『唐代法制史料集』の研究・編集・刊行（写真編一刊行済，解説編一編集中）

(4)内陸アジア出土古文献研究会の開催。

第1回 4月21日(土) 兜木正亨・池田 温「兜木正亨編『敦煌法華経目録』についての紹介・コメント」

第2回 5月26日(土) 山本達郎「敦煌発見の籍帳によってみた均田制の実施状況に関する二・三の問題」

第3回 7月11日(水) 金岡照光「敦煌の現状」

第4回 11月24日(土) 山口瑞鳳「チベット学の現状（国際学会帰朝報告）」

第5回 1月26日(土) 堀 敏一，梅村 坦「トルファン・ウルムチ紀行及びその途上書写した漢文・ウイグル文献について」

第6回 3月29日(土) 田中良昭「禅宗傳灯説の成立と発展」

(5)『唐代詔勅目録稿』の整理・編集・刊行。（編集済）（以上，前年度の継続）

宋代史研究委員会

【資料の整理・研究及び情報活動】 (1)『宋会要輯稿』食貨之部の要項及び語彙索引の作成。（編集済）

(2)宋代研究文献目録及び速報の作成。（前年度の継続）

明代史研究委員会

【講読・研究】「海瑞集」を主として，明代社会制度に関する文献の購読・研究。（毎月2回研究会の開催）

近代日本研究委員会

【資料の収集・研究】近代化における欧米列強と東アジアないし日本との国際関係、および近代日本と大陸諸民族との国際関係について、国際政治のみならず、国際経済の資料をも収集し、これらの世界史的性格を総合的に研究する。

清代史（満洲・蒙古）研究委員会

【校訂本・訳註の作成】(1)「旧満州檔」・「満文老檔」記事対照表の作成。

(2)東洋文庫所蔵鑲紅旗満洲都統衙門の檔案（主として満文）の研究・整理。（『鑲紅旗檔—乾隆朝—』作成）

朝鮮研究委員会

【資料の収集・研究】(1)朝鮮法制書の調査収集、およびその購読。

(2)李氏朝鮮の民政関係史料の収集・整理・研究。（前年度の継続）

(3)漢字の朝鮮音韻の研究・調査。

中央アジア・イスラム研究委員会

【資料の収集・研究】(1)隊商貿易史の研究。

(2)中央アジア・トルコ諸民族史の研究。

(3)イスラム社会の構造の研究。

(4)トルコ・日本両国の近代化の比較研究。

(5)イスラム国家論・都市論の月例研究会の開催。

第1回 5月25日 原 隆一「イランの農村について」

第2回 6月29日 中野咥雄「モロッコの農業生活誌」

第3回 9月28日 石田智子「ギリシャ留学から帰って」

第4回 10月26日 梅村 坦「草原とオアシス—ウルムチからトウルファンへ—」

第5回 11月30日 森川孝典「ガザリーの異端派批判」

第6回 12月14日 真田 安「近代カシュガリア・オアシスにおける権力構造」

第7回 1月25日 小田寿典「トルコ族のイスラム受容とその性格」

第8回 2月29日 小松久男「トルコ系ムスリム地域史の設定をめぐる」

第9回 3月28日 佐藤次高「スルタン・バイベルス時代のイクター」

南方史研究委員会

【資料の研究・編集】(1)『東洋文庫所蔵インド関係図書分類目録』の編集。（編集集中）

(2)インド古代社会に関するサンスクリット語、パーリー語、漢文資料を、マイクロ・フィルム、その他によって網羅的に収集し、その調査、分類を行う。

iii 特別調査研究

チベット研究委員会

【目 的】 チベット人との協同によるチベットの歴史・言語・宗教・社会の総合的研究。

【研究課題】 『チベット語文語辞典』の編纂。

【事業内容】 (1) 『チベット語文語辞典』編纂のための基礎的研究と基礎的作業。(進行中)

(2) チベット語文献の収集・整理。(昨年度に引き続きボン教関係文献24点を購入・整理した)

(3) 研究成果の刊行

『スタイン収集チベット語文献解題目録—第4分冊—』 B5判 1冊 (刊行済)

(4) チベット研究会の開催

・昭和54年11月24日(土)

山口瑞鳳 「チベット学の現状(国際学会帰朝報告)」

(5) 東洋文庫所蔵サンスクリット写本及び文献分類目録の編集・刊行 (『東洋文庫欧文紀要』No. 37掲載済)

近代中国研究委員会

【目的・研究課題】 近・現代中国研究関係資料の収集・整理とこれらの書誌的研究。

【事業内容】 (1) 共同利用研究

本年度は、中国近・現代史研究に関する日・中の研究状況等について、中国社会科学院近代史研究所長 劉 大年教授(昭和54年10月17日)、廈門大学副学長 傅 依凌教授(昭和55年2月16日)等と情報交換を行い、今後の課題として日・中学術交流の緊密化についても意見を交換をした。

(2) 情報交換及び参考業務 (近代中国研究室及び同参考図書室に於いて常時遂行)

(3) 図書・資料の収集

区 分	和 漢 書	洋 書	複 写 資 料
数 量	589冊	153冊	10リール

(4) 研究成果の刊行

① 『近代中国研究彙報 第2号』 A5判 1冊 (刊行済)

② 『明治以降日本人の中国旅行記(解題)』 A5判 1冊 (刊行済)(特別研究資料の出版事業による)

(5) その他の継続事業

① 中国を中心とする東アジア国際関係史資料の書誌的研究

②『東洋文庫所蔵近代中国関係図書分類増補目録（中文・日本文・欧文）』の作成

③『東洋文庫所蔵近・現代中国関係資料件名目録』の編集

iv 研究委員会

研究部の研究事業を企画実施する研究委員会は、5部門12研究委員会にわかれる。昭和54年度の各研究委員会の常任委員は以下のとおりである。

第1部 中国研究

東亜考古学：梅原末治，小山 勲，関野 雄，渡辺兼庸

古代史：越智重明，宇都木 章，河野六郎

唐代史（敦煌文献）：榎 一雄，池田 温，菊池英夫，土肥義和，藤枝 晃，
松本 明

宋代史：青山定雄，草野 靖，佐伯 富，斯波義信，周藤吉之，竺沙雅章，
中嶋 敏，古垣光一，渡辺紘良

明代史：田中正俊，鶴見尚弘，山根幸夫，大嶋立子

近代中国：市古宙三，河鱗源治，田中正俊，坂野正高，本庄比佐子，山根幸夫，
並木頼寿，新村容子

第2部 近代日本研究

近代日本：岩生成一，海野一隆，田中時彦，鳥海 靖，亀井 孝，酒井憲二

第3部 東北アジア研究

満州・蒙古（清代史）：榎 一雄，岡田英弘，神田信夫，松村 潤

朝鮮：河野六郎，末松保和，田川孝三，森岡 康

第4部 中央アジア・イスラム・チベット研究

中央アジア・イスラム：榎 一雄，梅村 坦，後藤 明，佐藤次高，清水宏祐，
志茂碩敏，永田雄三，花田宇秋，護 雅夫

チベット：榎 一雄，川崎信定，北村 甫，原田 覚，松濤誠達，山口瑞鳳，
ツルチム・ケサン，テンパ・ゲルツェン

第5部 インド・東南アジア研究

南方史：荒 松雄，生田 滋，岩生成一，榎 一雄，後藤均平，辻 直四郎，
原 実，松本信広，三根谷 徹，山崎元一，山本達郎

2. 学 術 図 書 出 版

東洋文庫欧文紀要

“Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko.” No. 37. 1979年刊
B 5 判 265頁

東洋文庫和文紀要

『東洋学報』第61巻 1・2号 昭和54年12月刊 A 5 判 260頁

『東洋学報』第61巻 3・4号 昭和55年3月刊 A 5 判 180頁

東洋文庫各種研究委員会刊行物

近代中国研究委員会

『明治以降日本人の中国旅行記(解題)』 昭和55年3月刊 A 5 判 348頁

『近代中国研究彙報』第2号 昭和55年3月刊 A 5 判 176頁

チベット研究委員会

『スタイン収集チベット語文献解題目録—第4分冊—』 昭和55年3月刊 B 5 判
158頁

東洋文庫諸目録其他刊行物

『東洋文庫新着図書目録—和書・中国書・朝鮮書—』 第27号 昭和54年9月刊 B
5 判 65頁

『財団法人東洋文庫書報』 第11号 昭和55年3月刊 A 5 判 184頁

『財団法人東洋文庫年報』 昭和53年度版 昭和55年3月刊 A 5 判 56頁

『第62回東洋文庫展示会』 昭和54年12月刊 B 5 判 32頁

3. 講 演 会

春期 東洋学講座(第311～314回)

(テーマ：敦煌地域の歴史と文化と自然)

榎 一雄 「支那史上における敦煌」(5月22日)

前田正名 「西北辺疆史上の姑臧(武威・涼州)」(5月29日)

池田 温 「敦煌文献—その性格と価値—」(6月5日)

保柳睦美 「敦煌を中心とする地域の自然環境」(6月12日)

秋期 東洋学講座 (第315～318回)

(テーマ：アジア大陸の都市の歴史的性格)

荒 松雄 「中世インドの都市デリー —13～16世紀の遺跡から—」(10月30日)

佐藤次高 「ムスリム都市と共同体」(11月6日)

斯波義信 「中国の都市—形態・機能・都市変革—」(11月13日)

榎 一雄 「中央アジアの都市の性格」(11月20日)

(なお、春秋二季の各講演の要旨は、『東洋文庫書報』第11号に掲載されている。)

特別講演会

U. リンドグレン (ドイツ) 「ティムールとヨーロッパ」(10月24日)

J. ウェルナー (ドイツ) 「南ロシアと中央アジアにおける匈奴の考古学的遺物について」(11月5日)

4. 展 示 会 (東洋文庫所蔵貴重資料の展示)

第62回 日 時：昭和54年12月1・2日 午前10～午後4時

場 所：東洋文庫閲覧室

展示書：洋書・一両年中物故欧人東洋学者の遺著

漢籍・明・清善本

国書・五山版と江戸期自筆本

5. 研 究 会 (東洋文庫談話会)

小林輝男「製本の技術と講習」(6月2日, 9日)

文 囀鉉「三国史記新羅本紀始祖記事形成過程に関して」(6月30日)

越智重明「東晋南朝貴族制」(9月29日)

藤本幸夫「朝鮮の訓について—千字文を中心に—」(2月16日)

黄 汎江「日本に於ける神話意識の展開過程に関して」(3月22日)

6. 研 究 者 養 成

チベット研究 1名 原田 覚「吐蕃仏教の研究」

中国研究 2名 並木頼寿「捻軍史を中心とする清末華北農村社会の研究」

新村容子「清末地主制の研究」

7. 国内・国外研究者への便宜供与

i 国内研究者への便宜供与

日本学術振興会流動研究員 九州大学教授 越智重明「中国・六朝社会史の研究」(昭和54年度9ヵ月間)

日本学術振興会奨励研究員 糟谷憲一「近代朝鮮のブルジョア的
改革運動と独立協会」(昭和54年度
1年間)(同年10月31日辞退)

文部省内地研究員 富山大学助教授 藤本幸夫「日本現存朝鮮古刊本の調査とその
書誌学的・語学的研究」(昭和54年度下
半期)

文部省内地研究員 金沢大学助手 前田恵美子「両大戦間の中国経済研究」(昭和
54年度下半期)(同年10月14日辞退)

ii 外国人研究者への便宜供与

全 漢昇 香港新亜研究所教授「東洋文庫所蔵中国経済史数量資料の調査研究」
(昭和54年度国際交流基金の招聘による)(昭和55年3月以降6ヵ月間)

文 暲鉉 大韓民国慶北大学校助教授(前年度の継続, 昭和54年11月帰国・15ヵ
月間)

黄 涓江 大韓民国檀国大学校教授(前年度の継続, 昭和55年8月まで)

Stuart R. Schram ロンドン大学教授(前年度の継続, 昭和54年7月帰国・9
ヵ月間)

王 徳毅 中華民国国立台湾大学教授「元・明・清名人伝記資料索引等の作成に
かかる調査研究」(昭和54年9月帰国・3
ヵ月間)

8. 職員の研究業績

(期間: 昭和54年4月1日～昭和55年3月31日まで)

略号: ①…著書 ②…編書 ③…論文 ④…学会動向 ⑤…書評・紹介 ⑥…翻訳
⑦…講演・研究発表 ⑧…その他(評論・雑記・座談会等)

池田 温

③「敦煌本に見える王羲之論書」(中国書論大系月報5, 8～12頁, 二玄社, 79年6
月), 「唐朝処遇外族官制略考」(隋唐帝国と東アジア世界, 251～278頁, 汲古書院,
79年8月), 「中国古写本識語集録稿(一)五世紀以前」(三蔵187, 188, 1～9, 1
～8頁, 大東出版, 79年10月), ⑤中山時子著「私のシルクロード」(月刊シルク

ロード6—2, 56頁, シルクロード社, 80年2月), 「宮崎市定著『中国史(上・下)』」(史学雑誌89—3, 108~109頁, 山川出版, 80年3月), ⑦「敦煌文献—その性格と価値—」(東洋文庫春期東洋学講座, 1979年6月5日, 要旨: 東洋文庫書報11, 166~168頁, 東洋文庫, 80年3月), 「敦煌・吐魯番漢文文書に現れたソグド人」(バリ, ペリオ生誕100年記念中ア古文献・碑刻会議, 1979年10月4日), 「中国における国家形成」(朝鮮史研究会20周年記念大会シンポジウム1, 1979年10月21日, 朝鮮史研究会論文集17, 63~73頁, 竜溪書舎, 80年3月), ⑧「唐代の辺境経営」(漢文研究シリーズ9 唐代の辺塞詩, 10~15頁, 尚学図書, 79年5月), 「吐魯番文書資料への期待」(月刊シルクロード6—1, 7頁, 80年1月), 「『歴史手帳』年代表改訂二項」(日本歴史380, 51~54頁, 吉川弘文館, 80年1月), 「シンポジウム『朝鮮の国家形成と東アジア』討論要旨」(朝鮮史研究会論文集17, 84~98頁, 80年3月)。

岩生成一

①『明治以前洋馬の輸入と増殖』(馬事文化財団, 1980年3月, 193頁), ②Dictionnaire Historique du Japon, Fascicule V: Lettre F. (監修, 日仏文化会館, 1980年3月, 124頁), ③「研究者の思い出あれこれ——ジャカルタの国立文書館について」(南方文化6, 217~234頁, 天理南方文化研究会, 1979年11月)。

梅村 坦

③「天山ウイグル王国と騎馬社会」(月刊シルクロード5—8, 35~39頁, シルクロード社, 1979年10月), ④「回顧と展望——北アジア——」(1978年の歴史学会) (史学雑誌88—5, 247~252頁, 史学会, 1979年5月), 「中国の研究機関と博物館——上海・洛陽・西安・蘭州・ウルムチ・トゥルファン——」(東洋文庫書報11, 121~160頁, 東洋文庫, 1980年3月), ⑦「草原と磧漠・オアシス——ウルムチからトゥルファンへ——」(イスラム国家論研究会, 1979年10月26日, 東洋文庫), 「蘭州・ウルムチ・トゥルファンの旅」(若手ユーラシア研究会, 1979年10月29日, 大阪大学), 「新疆(ウルムチ, トゥルファン)の文物を訪ねて——トゥルファンのウイグル文献——」(内陸アジア出土古文書研究会, 1980年1月26日, 東洋文庫)。

海野一隆

③「シーボルトと『日本境界略図』」(有坂隆道編『日本洋学史の研究』V, 101~128頁, 創元社, 1979年9月), 「人国記の版本と地図」(月刊古地図研究10—9, 2~5頁, 日本地図資料協会, 1979年11月), 「象徴としての地図」(月刊古地図研究10—11, 2~10頁, 同10—12, 2~6頁, 同11—1, 2~10頁, 1980年1・2・3月), 「西洋地球説の伝来(2)」(自然34—6, 62~69頁, 中央公論社, 1979年6月), 「地球説伝来異聞」(自然34—11, 78~85頁, 中央公論社, 1979年11月), ⑦「橋本宗吉世界図に利用された資料」(蘭学資料研究会第20回大会, 1979年4月21日, 要旨: 同会研究報告341, 1~2頁)。

榎 一雄

①『シルクロードの歴史から』(東京:研文出版, 1979年5月, 3+230頁), ③「ヨーロッパとアジア(10~13): 18世紀フランス流寓の支那人(3~6)」(月刊シルクロード, V-3, pp. 34~40, V-4, pp. 58~64, V-5, pp. 28~34, V-6, pp. 13~19, シルクロード社, 1979年4・5・6・7月), 「ヨーロッパとアジア(14~18): イタリア商人カルレッティのこと(1~5)」(月刊シルクロード, V-7, pp. 88~95, V-8, pp. 71~76, V-9, pp. 24~31, V-10, pp. 48~55, VI-1, pp. 19~25, 1979年8/9・10・11・12月, 1980年1月), 「董恂とその著書特に日記について(2)」(近代中国5, 151~162頁, 巖南堂書店, 1979年4月), 「中国と支那」(言論春秋63, 2頁, 中外ニュース社, 1979年10月15日), ⑧赤間英夫著「誰も書かない中国の戦中戦後, あゝ北京に, 再び。」(序文, 3頁, 東京:本郷出版社, 1979年12月15日), 「ギボンの魅力」(静岡新聞・8月24日朝刊, 信濃毎日新聞・9月5日夕刊, 日刊新聞愛媛・8月24日, 中国新聞・8月19日, 熊本日日新聞・8月20日), 「文化交流の基点」(言論春秋48, 1979年7月2日, p. 2), 「人間の偉さ」(言論春秋54, 1979年8月13日, p. 2), 「滄浪の水濁らば」(言論春秋73, 1979年12月24日, p. 2), 「天皇制を採用している以上元号の法制化は必要である」(元号法制化を求める各界の声, 元号法制化実現国民会議刊行, 1979年5月4日, pp. 36), 「象徴天皇制に相しい元号(元号新聞8号, pp. 2, 1979年5月24日), 「あるリベラリストの生涯——ハロルド=J=ラスキについて」(中央公論94-8, pp. 240~252, 1979年8月), 「則天武后と乾陵」(アジア時報通巻第113号, pp. 2~4, 1979年9月), 「木村龍生君」(木村龍生追悼文集, 木村五作刊行, pp. 28~30, 1979年10月), 「金子良太氏の訃」(東洋学報61-1・2, 1979年12月, pp. 203~216), 「榎 一雄シリーズ日本人一」(中央公論94-11, 1979年11月特大号), 「にんげん訪問(榎一雄)」(朝日ジャーナル21-45, 1979年11月16日号, 96~102頁), 「オアンデュの日記」(歴史と人物, 第10年第2号, 1979年2月1日, 25~27頁), 「東方学編輯後記」(東方学57・58, 東方学会, 1979年1月, 7月), 「第62回東洋文庫展示会目録洋書之部」(東洋文庫, 1979年12月1, 2日, 1~25頁)。

越智重明

③「漢六朝の家産分割と二重家産」(東洋学報61-1・2, 1~34頁, 東洋文庫, 1979年12月), 「北朝の下層身分をめぐって」(九州大学東洋史論集8, 1~19頁, 九州大学東洋史研究会, 1980年3月), 「魏晉時代の四征將軍と都督」(史淵117, 1~31頁, 九州大学文学部, 1980年3月), ⑦「東晉南朝貴族制」(東洋文庫談話会, 1979年9月29日)。

大嶋立子

⑤「牧野修二著『元代勾当官の体系的研究』」(東洋学報61-3・4, 103~106頁, 東洋文庫, 1980年3月)。

- ①『康熙帝の手紙』(中公新書559, 199頁, 中央公論社, 1979年11月), 『国際誤解の構造』(本間長世らと共著, 294頁, PHP研究所, 1979年9月), 『アジア文明の原像』(飯島茂らと共著, 295頁, 日本放送出版協会, 1979年10月), 『世界の中の日本文字』(橋本萬太郎らと共著, 318頁, 弘文堂, 1980年3月), 『西欧の正義 日本の正義』(木村尚三郎らと共著, 313頁, 三修社, 1980年3月), ③「甦える古代の真実とロマン」(正論65, 206～213頁, サンケイ出版, 1979年4月), 「中国意外史講座 8 神」(月刊シルクロード5—3, 55～59頁, 1979年4月), 「中国に片思いしている日本人」(30億182, 14～18頁, 日本青年会議所, 1979年5月), 「中国意外史講座 9 死」(月刊シルクロード5—4, 65～69頁, シルクロード, 1979年5月), 「鄧小平の中国 日中・米中・中越・台湾関係」(自由世界16—4, 12～22頁, 自由アジア社, 1979年5月), 「鄧小平の中国語学習法 祖国統一は中華民国承認?」(言論人414, 2～3頁, 言論人懇話会, 1979年5月15日), 「漢人商人の活躍」(えとのす12, 36～40頁, 新日本教育図書株式会社, 1979年5月), 「中国意外史講座10 笑」(月刊シルクロード5—5, 23～27頁, シルクロード社, 1979年6月), 「魯迅のなかの日本人」(中央公論94—7, 164～181頁, 中央公論社, 1979年7月), 「モンゴル人の戦争」(月刊シルクロード5—8, 29～33頁, シルクロード社, 1979年10月), “How Hong Taiji came to the throne.” (*Central Asiatic Journal*, V. XXIII, No. 3-4, pp. 250-259. Otto Harrassowitz, 1979), “Galdan’s death: When and how.” (*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No. 37, pp. 91-97. Toyo Bunko, 1979), “Outer Mongolia through the eyes of Emperor K’ang-hsi.” (*Journal of Asian and African Studies*, No. 18, pp. 1-11. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 1979), 「北京は中華民国を承認する」(諸君ノ12—1, 26～38頁, 文藝春秋, 1980年1月), 「征服王朝と被征服文化 八旗・北京官話・子弟書」(月刊シルクロード6—2, 16～20頁, シルクロード社, 1980年2月), 「中国人はなぜ日本に無関心なのか」(中央公論1117, 194～205頁, 中央公論社, 1980年3月), ④「第16回野尻湖クリルタイ」(通信37, 41～45頁, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1979年11月), 「第16回野尻湖クリルタイ」(東洋学報61—1・2, 216～225頁, 東洋文庫, 1979年12月), 「第5回東亜アルタイ学会」(東洋学報61—3・4, 144～147頁, 東洋文庫, 1980年3月), 「第5回東亜アルタイ学会」(通信38, 39～41頁, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1980年3月), ⑤「大和岩雄著『古事記と天武天皇の謎』」(週刊文春1057, 147頁, 文藝春秋, 1979年11月1日), ⑦「東アジアにおける日本人のイメージ」(講演・文化会議123, 32～39頁, 日本文化会議, 1979年7月11日), 「モンゴル文学史 草原の叙事詩をたずねて」(講座・朝日カルチャーセンター, 1979年7月7日, 14日, 21日, 28日, 8月4日, 11日, 18日, 25日, 9月1日, 8

日, 22日, 29日), “Chinese characters in Japan: Ideographs or a phonetic script?” (Lecture to a group of English teachers from China, sponsored by Time-Life Educational Systems Co. Ltd., at Time & Life Building, September 12, 1979), “Traditional culture: Its present state and changing roles in industrializing society.” (Paper presentation. *Proceedings of the 4th Asian Cultural Scholars' Convention, October 23-26, 1979*, pp. 134-143. Asian Parliamentarians' Union, Seoul), 「ユーラシア大陸文化講演会 草原の英雄たち 17世紀の北アジア史」(講演・シルクロード文化研究所, 1980年2月22日, 主婦の友ビル2号館), ⑧“Les tensions en Extrême-Orient: Tokyo s'efforce de redéfinir sa politique asiatique.” (Discours. *Le Monde*, No. 10530, 6. 4 Avril 1979), 「〈第3回〉オピニオン・リーダーとの懇談会」(討論・経済広報センター資料, 経済広報センター, 1979年4月11日), “Chinese images of Japan.” (Discussions. *Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan*, No. XXIV, pp. 139-140. The Tōhō Gakkai, June 16, 1979), 「フランス知識人とカミュ」(討論・文化会議121, 10~14頁, 日本文化会議, 1979年4月14日), 「極東の軍事情勢と日本の安全保障」(討論・文化会議122, 10~14頁, 日本文化会議, 1979年5月14日), 「共通一次の運命を占う(3) 大学二次試験の残されたもの」(談話・正論67, 209, 212頁, サンケイ出版, 1979年6月), 「中国人の早起き」(随筆・月刊健康185, 4~5頁, 月刊健康発行所, 1979年9月), 「翔ぶのが怖い」(随筆・Voice21, 37~39頁, PHP研究所, 1979年9月), 「タイムライフ・朴大統領暗殺の謎」(談話・週刊文春1058, 27頁, 文藝春秋, 1979年11月8日), 「結婚の功罪 戯評的結婚論」(随筆・言論人433, 3頁, 言論人懇話会, 1979年11月25日), 「ポール・M・トンプソン博士」(プロフィール・通信37, 38頁, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1979年11月), 「談話室」(通信・文化会議126, 9頁, 日本文化会議, 1979年12月), 「竹村健一の土曜論争 台湾独立は可能か」(討論・ラジオ関東, 1979年12月22日 9~9:40時放送), 「私の歴史学遍歴」(随筆・高校通信, 東書日本史・世界史53, 1頁, 東京書籍株式会社, 1980年1月), 「それは名実ともに違憲なのに現実には戦闘装備をした自衛隊という軍隊が実在する矛盾と現実をどうするのかどうなるのか」(談話・日刊ゲンダイ1287, 3頁, 講談社, 1980年2月18日), 「台湾の高砂族のこと」(随筆・正論76, 30~31頁, サンケイ出版, 1980年3月), 「日本共産党で何が起きているか」(談話・サンデー毎日59-9, 24~25頁, 毎日新聞社, 1980年3月2日)。

河鱸源治

③「李秀成親供についての諸問題」(近代中国6, 51~69頁, 巖南堂書店, 1979年9月), 「太平天国と日本」(月刊歴史教育1-7(通巻7), 35~40頁, 東京法令出版, 1979年10月), “The Trade in Hu-chou 湖州 Silk at Nan-hsin-chen 南潯鎮

under the Control of the Taipings" (*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*. No. 37, pp. 33-54, 1979年), ⑤「小島晋治著『太平天国革命の歴史と思想』(近代中国7, 10~17頁, 1980年2月), ⑧「Q&A: 太平天国のキリスト教の性格について」(月刊歴史教育1-7 (通巻7), 112~113頁, 東京法令出版, 1979年10月)。

糟谷憲一

③「なぜ朝鮮通信使は廃止されたか——朝鮮史料を中心に——」(歴史評論355, 8~23, 42頁, 1979年11月), ⑤「姜萬吉著『分断時代と歴史認識』(朝鮮史研究会会報54, 1979年8月, 18~21頁), 「安秉珪著『朝鮮社会の構造と日本帝国主義』(社会経済史学45-4, 1979年12月, 107~109頁), ⑥「李基白著『韓国史新論<改訂新版>』(武田幸男他共訳, 学生社, 1979年11月, 311~444頁), ⑦「書評・姜東鎮著『日本の朝鮮支配政策史研究』(朝鮮史研究会1979年4月例会, 1979年4月21日, 要旨: 朝鮮史研究会会報58, 1980年4月, 21~23頁), 「朝鮮通信使廃止の背景」(朝鮮史研究会1979年12月例会, 1979年12月22日)。

北村 甫

②『日本の言語学 第2巻 音韻』(柴田武, 金田一春彦両氏と共編, 解説「音声と音韻」執筆同書617~629頁, 大修館書店, 1980年3月, 655頁)。

小山 勲

⑧「訪訪原遺跡<松戸の遺跡21>」(かみしき22, 1頁, 下総史料館, 1980年2月)。

河野六郎

⑧「ベルンハルド・カールグレン先生の長逝を悼む」(東洋学報61-1・2, 201~208頁, 東洋文庫, 1979年12月)。

黄 汎江

③「両班伝研究」(朝鮮学報92, 85~107頁, 朝鮮学会, 1979年7月), ⑦「韓国文学に於ける不羈人像」(東京外国語大学朝鮮語科特講, 1979年7月6日), 「日本神話の中の韓国」(韓国文化院文化講座“韓国から見た日本の古代文化”, 1979年8月19日, 要旨: 韓国文化2, 4~8頁), 「日本に於ける神話意識の展開過程に関して」(東洋文庫談話会, 1980年3月22日), ⑧「PROFILES」(CENTER NEWS 3, 国際交流基金日本研究センター, 1979年7月)。

佐伯 富

①『宋史河渠志索引』(省心書房, 216頁, 1979年10月), ③「山西商人の起源と沿革」(東方学58, 1~24頁, 東方学会, 1979年7月), 「漢代の贈贈について」(史林62-5, 1~12頁, 史学研究会, 1979年9月)。

酒井憲二

②『寛永諸家系図伝 第一巻』(翻刻協力, 274頁, 続群書類従完成会, 1980年1月),

③「甲陽軍鑑末書について」(図書館短大紀要17, 88~100頁, 1980年3月), ⑤「小島幸枝編『耶蘇会板落葉集総索引』」(東海学園国語国文16, 140~143頁, 1979年9月)。

志茂碩敏

③「Ghāzān Khān 政権の中核群について」(アジア・アフリカ言語文化研究18, 56~150頁, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1979年12月)。

斯波義信

①『アジア文明の原像』(飯島 茂編・共著, 日本放送出版協会, 295頁, 1979年10月), ③『『新刻客商一覽醒迷天下水陸路程』について』(森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集, 903~918頁, 同書刊行会, 1979年12月), ⑦「江南デルタ」(東南アジアのデルタ開発シンポジウム報告, 京都大学東南アジア研究センター, 1979年3月9日), 「占城稻をめぐって」(江南デルタ開拓史シンポジウム報告, 1979年7月29日), 「函館華僑の活動と歴史について」(第3回文化摩擦シンポジウム報告, 1979年12月15日), 「中国の都市——形態・機能・都市変革——」(東洋文庫秋期東洋学講座, 1979年11月13日, 要旨: 東洋文庫書報11, 172~174頁, 1980年3月)。

滋賀秀三

①『唐律疏議訳註篇1〔名例〕』(律令研究会編『訳註日本律令』5, 東京堂, 357頁, 1979年10月), ⑤「小林 宏・高塩 博著「律集解の構成と唐律疏議の原文について」」(法制史研究29, 169~171頁, 法制史学会, 1980年3月)。

田川孝三

③「李朝後半期における倉庫労務者の一例——宣惠庁倉募民の場合——」(アジア史研究3, 9~30頁, 中央大学白東史学会, 1979年3月), 「大典詞訟類聚及びその類書」(東方学志23・24, 20頁, 韓国延世大学国学研究所, 1980年2月), ⑦「李朝後半期の地方自治組織及び地域社会の諸問題」(九州大学史学会, 1979年12月8日)。

竺沙雅章

③「朱三太子案について——清初秘密結社に関する一考察」(史林62-4, 1~21頁, 1979年7月), 「宋代壳牘考」(仏教史学研究22-1, 1~40頁, 1979年10月), 「宋代墳寺考」(東洋学報61-1・2, 35~68頁, 1979年12月), 「宋朝の宗教政策——とくに寺観の賜額について——」(科研費総合研究(A)研究報告・宋元代の社会と宗教の総合的研究, 1~11頁, 1980年3月), ⑧「京都での任継愈先生」(京都日中学術交流懇談会々報5, 11頁, 1979年10月)。

鳥海 靖

②『田中正造全集 第11巻 日記3』(編集担当, <解題執筆同書617~632頁>, 岩波書店, 632頁, 1979年7月), 『伊藤博文関係文書 第8巻』(伊藤隆氏らと共編, 塙書房, 448頁, 1980年2月), ③「明治天皇は操り人形だったか」(諸君, 11-11,

148～161頁, 文藝春秋社, 1979年11月), 「第一次大戦後の日本外交と国際環境」(月刊歴史教育2—1, 32～37頁, 歴史教育研究会, 1980年1月), ⑤「<史料紹介>日中平和工作に関する一史料——松本蔵次文書から——」(伊藤隆氏と共同執筆, 東京大学教養学部人文科学科紀要70, 45～101頁, 東京大学教養学部, 1980年3月), 「本の中の本——児島譲『東京裁判』」(諸君ノ11—4, 213頁, 文藝春秋社, 1979年4月), 「本の中の本——坂根義久校注『青木周蔵自伝』」(諸君ノ11—5, 213頁, 文藝春秋社, 1979年5月), 「本の中の本——宮内省臨時帝室編修局編『明治天皇紀』全13巻」(諸君ノ11—6, 215頁, 文藝春秋社, 1979年6月), ⑧「今月の日本史」(歴史読本24—7, 24—12, 25—2, 170～171頁, 新人物往来社, 1979年6月, 10月, 1980年2月), 「東西文化比較セミナー<日本の知識人>に参加して」(文化会議127, 14～15頁, 日本文化会議, 1980年1月), 「田中正造と平田東助」(田中正造全集月報18<第19巻月報>, 10～13頁, 岩波書店, 1980年3月)。

永田雄三

①“*Materials on the Bosnian Notables*,” (*Studia Culturae Islamicae*, No. 11, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, 1979), ③XVI. Yüzyılda Manisa Köyleri; 1531 Tarihli Saruhan Sancağına ait Bir Tahrir Defterini Inceleme Denemesi, (*Tarih Dergisi*, No. 32, Istanbul, 1979), ⑥ボズクルト・ギュヴェンチ「トルコにおける社会・文化変容——危機?それとも発展?」(通信35, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1979年3月), S・アルプ「イェシルウルマク河上流域の地理——マシャトコヒョニク出土のヒッタイト文書から——」(オリエント21—2, オリエント学会, 1979年3月), ⑧「イスタンブル国立文書館」(学燈77—3, (株)丸善, 1980年3月)。

原 実

③“Hindu Concepts of Teacher, Sanskrit *guru* and *ācārya*,” *Sanskrit and Indian Studies*, Essays in Honour of Professor Daniel H.H. Ingalls (Dordrecht 1979) pp. 93–118. ⑦“Birth of Extra-ordinary Persons in Ancient Indian Literature,” *Symposium of Indian Religions*, held at University of Manchester 22 April 1979. “Transfer of Merit in Sanskrit Literature and Religion,” *Department of Sanskrit*, University of Edinburgh, 24 April 1979. “Some Aspects of Ancient Indian Asceticism,” *The Radhakrishnan Memorial Lectures 1978–79*, University of Oxford 14, 15, 21, 22 June, 1979.

原田 覚

②『スタイン蒐集チベット語文献解題目録——第4分冊——』(東洋文庫チベット研究委員会編, 東洋文庫, 1980年3月, 158頁)。③「摩訶衍禪師考」(仏教学8, 109～133頁, 仏教学研究會, 1979年10月), 「摩訶衍禪師と頓門」(印度学仏教学研究28—

1, pp. 432~428, 日本印度学仏教学会, 1979年12月)。

坂野正高

③「馬建忠のインド紀行、『南行記』——1881年, アヘン貿易漸減案打診の旅」(東洋史研究38—1, 622~663頁, 1980年3月), ⑦「失意の改革思想家馬建忠——その外交論と海軍論を中心として」(北海道大学法学部政治研究会, 1979年7月11日), 「書誌を使う, 集める, 作る——一研究者の経験」(私立大学図書館協会東地区研究部会書誌作成分科会, 国際基督教大学図書館セミナールーム, 1979年11月1日), ⑧「書誌を作る——J・K・Fairbank 教授との共同作業の思い出」(書誌索引展望4—1, 1~5頁, 1980年2月), 「マカオの一日」(アジア時報119, 6~7頁, 1980年3月)。

藤枝 晃

④「オーレル・スタイン「千佛洞」図版解説」(京都:臨川書店, 1980年2月, 15頁), ⑦「敦煌と西域」(朝日カルチャセンター春期講座第1部, 1979年4月, 5月, 6月), 「敦煌藏経洞の原形」(平安博物館春期講座, 1979年6月30日), “Une reconstruction de la “Bibliothèque” de Touen-houang”. (manuscripts et Inscriptions de Haute Asie du Ve au XI^e siècle, Colloque Internationale, 1979年10月4日), 「再び敦煌の絹絵について」(龍谷大学仏教文化研究所, 1980年3月17日), ⑧「碧渡る赤い郵袋(東西交流の実り, 4)」(大阪読売新聞, 1979年6月8日夕刊), 「座談会・夏鼐, 貝塚茂樹, 樋口隆康三氏と<発掘進む中国古代史, 夏・考古研究所長に聞く>」(毎日新聞, 1979年6月15日), 「宣長の周辺——植松有信と石塚龍麿——」(小松茂美編『日本書蹟大鑑』月報15(第22巻付録), 1979年8月, 講談社, 3頁), 「表紙のことば」(言語生活328—339, 筑摩書房, 1979年4月~1980年3月各号扉頁)。

藤本幸夫

③「『朝鮮倭国字彙』について」(『朝鮮倭国字彙』影印本解題, 24頁, 雄松堂, 1979年10月), 「朝鮮版『千字文』の系統——其一」(朝鮮学報94, 63~117頁, 朝鮮学会, 1980年1月), ⑤「大東急記念文庫所蔵『千字文』」(朝鮮学報93, 131~218頁, 朝鮮学会, 1979年10月), ⑦「朝鮮の訓に就いて——『千字文』を中心に」(東洋文庫談話会, 1980年2月16日, 要旨: 東洋文庫書報12, 1981年3月刊行予定)。

古垣光一

⑦「宋代官僚制についての一私見——考課制度からみて——」(中央大学白東史学会, 1979年12月1日, 要旨: アジア史研究4)。

松濤誠達

④「ウパニシャッドの哲人」(『人類の知的遺産』2, 講談社, 1980年1月, 399+4頁), ③「Vājasaneyi-samhitā と Mahabhārata との関係——ラージャスーヤにお

ける一つのマントラをめぐる——」(大正大学研究紀要(仏教・文学部) 65, 315～328頁, 1980年3月), 「A Descriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Toyo Bunko」(Ryōtai Kaneko, Kōjun Saito 共著, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*. No. 37, 1979, 159～191頁)。

森岡 康

②『増補東洋文庫朝鮮本分類目録』(田川孝三監修, 150+60頁, 東洋文庫, 1979年3月)。

山崎元一

①『インド社会と新仏教——アンベードカルの人と思想——』(刀水書房, 1979年7月, XX+270頁), ③「古代インドの国家と宗教」(堀敏一・山崎利男編『概説東洋史』, 236～246頁, 有斐閣, 1979年7月), ⑤「ロミラニターパル著『古代インド社会史——若干の解釈——』」(東洋学報61—1・2, 194～200頁, 東洋文庫, 1979年12月), ⑧「古代マガダ国の旅」(月刊歴史教育1—2, 8～9頁, 東京法令出版, 1979年5月), 「後期ヴェーダ時代の社会」(『人類の知的遺産』月報22, 1～3頁, 講談社, 1979年5月), 「アショーク王位説をめぐる——塚本啓祥氏の批判に答える(1)——」(春秋212, 8～10頁, 春秋社, 1980年2/3月)。

山根幸夫

①『近代日中関係の研究——対華文化事業を中心にして——』(東京女子大学東洋史研究室, 1980年3月, 80頁), ③「上海自然科学研究所について——対華文化事業の一考察——」(東京女子大学論集30—1, 1～38頁, 東京女子大学学会, 1979年9月), ③「上海日本近代科学図書館について」(史論33, 48～53頁, 東京女子大学読史会), ③“Trend in Postwar Japanese Studies of Ming History: A Bibliographical Introduction” (*Acta Asiatica* 38, 93～123頁, 東方学会, 1980年3月), ④「五四運動に関する出版物——1979年における——」(近代中国研究彙報2, 1～11頁, 東洋文庫, 1980年3月), ⑤「彭沢周著『近代中国関係研究論集』」(東洋学報61—1・2, 177～181頁, 東洋文庫, 1979年12月), 「香港大学中文学会編『五四運動60周年紀念論文集』」(東洋学報61—3・4, 109～113頁, 東洋文庫, 1980年3月), ⑥「李成珪著『清初地方統治の確立過程と郷紳(下)——順治年間の山東地方を中心にして——』」(稲田英子共訳, 明代史研究7, 59～78頁, 明代史研究会, 1979年11月), ⑦「戦後日本における明代史研究の動向」(中国社会科学院 経済史研究所 學術報告, 1980年3月31日, 北京), ⑧「『五四運動回憶録』新・旧版について」(燎原8, 11～12頁, 燎原書店, 1979年6月), 「三木寿雄先生と私」(『三木寿雄先生追想文集, 85～88頁, 三木先生追悼記念会, 1979年)。

渡辺兼庸

- ③『『増削会津石譜』について(一)』(福島考古21, 7～12頁, 福島県考古学会, 1980年3月), 「小野蘭山と東洋文庫所蔵の自筆本」(東洋文庫書報11, 91～120頁, 1980年3月)。

渡辺紘良

- ③「『淳熙16年徳政令について』(東洋学報61—1・2, 139～176頁, 東洋文庫, 1979年12月), 「陸棠伝訳注」(独協医科大学教養医学科紀要2, 45～56頁, 独協医科大学教養医学科, 1979年12月)。

IV 業務報告

1. 庶務報告

A. 財団法人東洋文庫理事会・評議員会

理 事 会

第 224 回 開催日 昭和54年 6 月 5 日 (火)

出席者 榎 一雄, 有光次郎, 高垣寅次郎, 松本重治, 山本達郎

委任状 辻 直四郎, 小笠原光雄, 川北禎一, 河野六郎, 酒井杏之助,
徳川宗敬, 中島正樹

第 225 回 開催日 昭和54年11月27日 (火)

出席者 榎 一雄, 有光次郎, 小笠原光雄, 河野六郎, 高垣寅次郎,
松本重治

委任状 川北禎一, 酒井杏之助, 徳川宗敬, 山本達郎

評 議 員 会

第99回 開催日 昭和54年 6 月 5 日 (火)

出席者 坂本太郎

委任状 石川忠雄, 梅原未治, 岡本道雄, 清水 司, 中山素平,
長谷川周重, 俣野健輔, 向坊 隆

B. 東洋学連絡委員会

前期 開催日 昭和54年 5 月29日 (火)

出席者 榎 一雄, 岩生成一, 江上波夫, 中嶋 敏, 長尾雅人, 日比野丈夫
宮崎市定, 山本達郎, 吉川幸次郎

議 題 1. 昭和53年度財団法人東洋文庫事業報告について
2. 昭和54年度財団法人東洋文庫事業計画案について

後期 開催日 昭和54年11月 6 日 (火)

出席者 榎 一雄, 市古宙三, 植村清二, 岩生成一, 中嶋 敏, 日比野丈夫
宮崎市定

- 議 題 1. 昭和54年度財団法人東洋文庫事業中間報告について
 2. 昭和55年度財団法人東洋文庫事業計画案について
 3. 東洋学連絡委員会委員の改選について

2. 人 事 報 告

役員異動

年 月 日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
54. 9. 24	理 事 長	辻 直四郎	逝 去	京都大学学長 "
54. 11. 27	理事長代理	榎 一 雄	就 任	
54. 12. 16	評 議 員	岡 本 道 雄	退 任	
"	"	沢 田 敏 男	就 任	

委員異動

年 月 日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
54. 9. 2	東洋学連絡 委員会委員	栗 原 朋 信	逝 去	国土館大学客員教授
54. 9. 24	東洋学連絡 委員会委員長	辻 直四郎	"	
54. 10. 1	東洋学連絡 委員会委員	植 村 清 二	就 任	
54. 11. 6	東洋学連絡 委員会委員長	榎 一 雄	"	
55. 1. 31	東洋学連絡 委員会委員	塚 本 善 隆	逝 去	

職員異動

年月日	役職名	氏名	区分	備考
54. 4. 1	研究助手	大嶋立子	就職	大阪大学教授 大茶の水女子大学助教授
"	研究員(兼任)	海野一隆	"	
"	"	佐藤次高	"	
54. 9. 1	研究員	河鱒源治	"	
54. 11. 27	附置ユネスコ東 アジア文化研究 センター所長	榎一雄	退職	東京大学教授 大阪大学教授
"	"	河野六郎	就職	
54. 12. 11	研究員(兼任)	原實	"	
55. 1. 5	"	斯波義信	"	
55. 3. 31	司書	中島正之	退職	
"	"	森岡康	"	

受賞

年月日	役職名	氏名	区分	備考
54. 5. 3	評議員	長谷川周重	叙勲	勲一等瑞宝章
54. 9. 24	理事長	辻直四郎	"	"

表彰

年月日	役職名	氏名	区分	備考
54. 11. 19	司書	児野寿満子	勤続	20年
"	"	大塚祐子	"	"

3. 会 計 報 告

昭和54年度財団法人東洋文庫収支決算書

昭和55年3月31日現在

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額(千円)	科 目	金 額(千円)
一 般 会 計		一 般 会 計	
民間学術研究振興費	44,951	経 常 費	70,171
国庫補助費収入	46,385	事 業 費	52,945
維持会費収入	6,607		
財産収入	25,102		
事業収入	71		
雑収入			
小 計	123,116	小 計	123,116
特 別 会 計		特 別 会 計	
文部省科学研究費補助金	5,500	文 部 省 科 学 研 究 費	5,500
民間研究助成金	9,819	民 間 研 究 助 成 金 研 究 費	9,819
小 計	15,319	小 計	15,319
合 計	138,435	合 計	138,435

国庫補助金年度別受入額一覧表

年度別	一般会計	特別会計 (科学研究費補助金)	合計
	千円	千円	千円
22	320	—	320
23	600	—	600
24	720	—	720
25	530	—	530
26	350	1,070	1,420
27	600	150	750
28	1,000	4,500	5,500
29	1,000	1,300	2,300
30	3,850	4,310	8,160
31	6,850	1,940	8,790
32	6,850	2,650	9,500
33	6,850	500	7,350
34	6,765	5,640	12,405
35	6,562	6,010	12,572
36	6,000	3,600	9,600
37	6,000	2,010	8,010
38	6,000	2,785	8,785
39	7,828	3,350	11,178
40	8,382	8,895	17,277
41	9,166	9,160	18,326
	(9,500)		
42	10,901	7,560	18,461
	(11,500)		
43	11,500	9,900	21,400
44	13,236	7,300	20,536
	(13,500)		
45	14,827	6,900	21,727
	(15,300)		
46	16,659	13,900	30,559
	(17,200)		
47	18,377	11,000	29,377
	(19,000)		
48	24,173	3,300	27,473
	(25,000)		
49	28,383	9,420	37,803
	(29,000)		
50	30,849	14,040	44,889
	(33,000)		
51	33,750	0	33,750
	(34,500)		
52	35,883	10,000	45,883
	(36,632)		
53	40,509	11,000	51,509
	(41,036)		
54	44,951	5,500	50,451
	(45,536)		

() 内は当初予算額

文部省科学研究費補助金年度別受入一覧表

年度	区 分	研 究 課 題	研究代表者	補助金額 (千円)
26	研究成果刊行費	ブラーフマナとシュラウ ターストラとの関係	辻 直四郎	400
	"	日清戦役外交史の研究	岩井大慧	200
	"	支那経済史考証	和田 清	390
	各 個 研 究	古代中国の民族構成の研究	"	80
27	研究成果刊行費	明代建州女直史研究	園田一亀	150
28	機 関 研 究	スタイン博士蒐集敦煌文 書のマイクロフィルム撮 影並びにその整理研究	岩井大慧	4,500
29	"	"	"	1,300
30	"	"	"	4,000
	研究成果刊行費	満 文 老 檔 I	神田信夫	310
31	機 関 研 究	スタイン博士蒐集敦煌文 書のマイクロフィルム撮 影並びにその整理研究	岩井大慧	1,700
	研究成果刊行費	満 文 老 檔 II	神田信夫	240
32	機 関 研 究	スタイン博士蒐集敦煌文 書のマイクロフィルム撮 影並びにその整理研究	岩井大慧	1,700
	総 合 研 究	スタイン将来敦煌文献の 調査研究	鈴木 俊	580
	研究成果刊行費	満 文 老 檔 III	神田信夫	370
33	総 合 研 究	スタイン将来敦煌文献の 調査研究	鈴木 俊	500
34	機 関 研 究	中世以降における東アジア 諸地域の貴重文献の整 理研究	岩井大慧	4,000
	総 合 研 究	スタイン将来敦煌文献の 調査研究	鈴木 俊	800
	"	日唐法制経済文書の比較 研究—正倉院文書と敦煌 文書—	仁井田 陞	500
	研究成果刊行費	満 文 老 檔 IV	神田信夫	340

年度	区 分	研 究 課 題	研究代表者	補助金額（千円）
35	機 関 研 究	中世以降における東アジア諸地域の貴重文献の整理研究	岩 井 大 慧	4,800
	総 合 研 究	西域出土古文書・古文献の調査研究	鈴 木 俊	900
	研究成果刊行費	満 文 老 檔 V	神田信夫	310
36	機 関 研 究 B	イスラーム諸国の社会構造の研究	榎 一 雄	1,500
	〃 C	中世以降における東アジア諸地域の貴重文献の整理研究	岩 井 大 慧	600
	総 合 研 究	西域出土古文書・古文献の調査研究	鈴 木 俊	1,200
37	機 関 研 究 B	イスラーム諸国の社会構造	榎 一 雄	1,700
	研究成果刊行費	満 文 老 檔 VII	神田信夫	310
38	特 定 研 究	イスラーム諸国の社会構造	榎 一 雄	1,700
	研究成果刊行費	日本文・中国文・朝鮮文等逐次刊行物目録	岩 井 大 慧	1,045
	各 個 研 究	李朝仁祖朝に於ける贖還問題と対清貿易	森 岡 康	40
39	特 定 研 究 (2)	イスラーム諸国の社会構造	榎 一 雄	1,700
	総 合 研 究	宋代以降の中国農村社会経済関係語彙に関する研究	青 山 定 雄	750
	研究成果刊行費	中国地方志連合目録	岩 井 大 慧	850
40	各 個 研 究	北日本における晩期縄文文化の研究	渡 辺 兼 庸	50
	機 関 研 究 A	地方志にもとづく中国社会の研究	田 川 孝 三	5,400
	特 定 研 究 (2)	イスラーム諸国の社会構造	榎 一 雄	1,440
40	総 合 研 究	宋代以降の中国農村社会経済関係語彙に関する研究	青 山 定 雄	675
	研究成果刊行費	梅原考古資料目録（朝鮮之部）	榎 一 雄	550
	〃	漢 籍 叢 書 所 在 目 録	森 鹿 三	830

年度	区 分	研 究 課 題	研究代表者	補助金額 (千円)
41	機 関 研 究 A	地方志にもとづく中国社会の研究	田 川 孝 三	4,140
	特 定 研 究 (2)	日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景	榎 一 雄	2,700
	総 合 研 究	金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究	末 松 保 和	1,200
	〃	ペーリ語辞典編集のための基礎的研究	辻 直四郎	300
	研究成果刊行費	漢籍分類目録集部 (東洋文庫の部)	〃	820
42	機 関 研 究 A	地方志にもとづく中国社会の研究	田 川 孝 三	3,360
	特 定 研 究 (2)	日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景	榎 一 雄	2,700
	総 合 研 究	金石文を主とした朝鮮史の基礎的研究	末 松 保 和	1,200
	〃	ペーリ語辞典編纂のための基礎的研究	辻 直四郎	300
43	一 般 研 究 A	唐末以降1940年代にいたる中国の地主制の体系的 研究	青 山 定 雄	7,080
	特 定 研 究 (2)	日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景	榎 一 雄	2,820
44	一 般 研 究 A	唐末以降1940年代にいたる中国の地主制の体系的 研究	青 山 定 雄	2,000
	特 定 研 究 (2)	日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景	榎 一 雄	2,820
	総 合 研 究 A	中国周辺諸言語に関する中国資料の調査研究	辻 直四郎	2,000
	研究成果刊行費	唐 代 の 服 飾	原 田 淑 人	480
45	一 般 研 究 A	唐末以降1940年代にいたる中国の地主制の体系的 研究	青 山 定 雄	800
	総 合 研 究 A	中国周辺諸言語に関する中国資料の調査研究	辻 直四郎	1,600
	海外学術調査	インド・シッキム・ブータン・ネパールにおけるチベット文献の調査と収集	榎 一 雄	4,500

年度	区 分	研 究 課 題	研究代表者	補助金額（千円）
46	一 般 研 究 A	日本を中心とする近代東 アジア国際関係の史的研 究	市 古 宙 三	11,500
	総 合 研 究 A	中国周辺諸言語に関する 中国資料の調査研究	辻 直四郎	1,400
	〃	李朝後半期の農村社会文 化	田 川 孝 三	1,000
47	一 般 研 究 A	日本を中心とする近代東 アジア国際関係	市 古 宙 三	5,000
	総 合 研 究 A	李朝後半期の農村社会文 化	田 川 孝 三	1,600
	海外学術調査	インド・シッキム・ブー タン・ネパールにおける チベット文献の調査と収 集	榎 一 雄	4,400
48	特 定 研 究 (2)	両大戦間の中国をめぐる 国際情勢	市 古 宙 三	2,500
	海外学術調査	東洋文庫インド・シッキ ム・ネパール調査隊収集 チベット文献の整理と目 録作成	北 村 甫	800
49	一 般 研 究 A	南アジアにおける文化変 容の研究および資料の収 集	榎 一 雄	6,690
	〃 D	明代の地方行政区割、府 ・州・県の地理的沿革に 関する研究	鶴 見 尚 弘	230
	特 定 研 究 (2)	両大戦間の中国をめぐる 国際情勢	市 古 宙 三	2,500
50	一 般 研 究 A	イスラム社会の構造に関 する歴史学的研究	辻 直四郎	11,500
	〃 D	敦煌出土寺院関係古文書 の基礎的研究	土 肥 義 和	290
	特 定 研 究 (2)	両大戦間の中国をめぐる 国際情勢	榎 一 雄	2,250
52	一 般 研 究 A	中国を中心とする東アジ ア国際関係史資料の書誌 的研究	榎 一 雄	10,000

年度	区 分	研 究 課 題	研究代表者	補助金額（千円）
53	一 般 研 究 A	中国を中心とする東アジア国際関係史資料の書誌的研究	榎 一 雄	3,000
	総 合 研 究 A	仏典翻訳の対照意味論的研究	辻 直四郎	3,600
	〃	李朝に於ける地方自治組織並びに農村社会経済語彙の研究	田 川 孝 三	4,400
54	一 般 研 究 A	中国を中心とする東アジア国際関係史資料の書誌的研究	榎 一 雄	2,000
	総 合 研 究 A	仏典翻訳の対照意味論的研究	辻 直四郎 (原 田 覺)	3,000
	〃	李朝に於ける地方自治組織並びに農村社会経済語彙の研究	田 川 孝 三	500

文部省補助金研究者養成費年度別支給一覧表

年度	研究者氏名	研 究 課 題	現 職	補助金 年 額 (千円)	備 考
31	永 積 昭	近世東南アジア貿易史の研究 —オランダ東印度会社の活動を中心として—	東京大学教授	480	
	高 畠 稔	インド土地制度史の研究—イギリスの統治下における—	北海道大学教授		
	斯波 義信	中国社会経済史の研究—特に宋代の商業史的研究を中心として—	大阪大学教授		
	本田 實信	蒙古民族史の研究	京都大学教授		
	山根 幸夫	15世紀以降の中国における郷村統治の研究	東京女子大学教授		
	松 村 潤	清朝初期史—明・清・蒙古・満州・朝鮮の文獻史料の比較検討—	日本大学教授		
	山口 瑞鳳	梵蔵文文法論	東京大学教授		
32	永 積 昭	(前 掲 出)	(前 掲 出)	480	
	高 畠 稔	(〃)	(〃)		
	斯波 義信	(〃)	(〃)		
	池 田 温	唐代社会経済史研究	東京大学教授		
	山根 幸夫	(前 掲 出)	(前 掲 出)		
	松 村 潤	(〃)	(〃)		
	山口 瑞鳳	(〃)	(〃)		
33	永 積 昭	(前 掲 出)	(前 掲 出)	480	
	高 畠 稔	(〃)	(〃)		
34	永 積 昭	(前 掲 出)	(前 掲 出)	480	
	高 畠 稔	(〃)	(〃)		
35	生 田 滋	近世インドネシア史研究	財団法人東洋文庫 附置ユネスコ東アジア文化研究センター研究員	480	
	佐々木正哉	近世中国排外運動の研究	明治大学教授		
36	佐々木正哉	(前 掲 出)	(前 掲 出)	480	
	金子 良太	サキヤ派史の研究	(逝去昭54.3.15)		
37	金子 良太	(前 掲 出)	(前 掲 出)	480	
	酒井 良樹	ベトナムの国際的位置	政治評論家		

年度	研究者氏名	研 究 課 題	現 職	補助金 年 額 (千円)	備 考
38	金子 良太 武田 幸男	(前 掲 出) 朝鮮中世史研究	(前 掲 出) 東京大学助教授	480	
39	川崎 信定 山口 瑞鳳 山崎 元一	チベットにおける仏教思想の展開—唯識思想を中心とした跡づけ— チベット歴史辞典の編集及びチベット暦—第6代ダライラマ伝説の研究— インド古代史の研究	筑波大学助教授 (前 掲 出) 国学院大学教授	480	4.1-10.31 11.1-3.31
40	山口 瑞鳳 山崎 元一	(前 掲 出) (//)	(前 掲 出) (//)	480	
41	山口 瑞鳳 山崎 元一	(前 掲 出) (//)	(前 掲 出) (//)	480	
42	後 藤 明 西 義 郎	マホメット時代のアラブ社会の考察 ビルマ語の研究	山形大学助教授 鹿児島大学助教授	600	
43	後 藤 明 西 義 郎	(前 掲 出) (//)	(前 掲 出) (//)	600	
44	後 藤 明 金子 良太	(前 掲 出) 西域出土チベット文献の研究	(前 掲 出) (//)	600	
45	長 正 統 川崎 信定 永田 雄三	李朝後期の日鮮貿易史 チベット仏教古派資料の研究 トルコの近代化に関する社会経済史的研究	九州大学助教授 (前 掲 出) 東京外国語大学助教授	1,080	
46	長 正 統 川崎 信定 渡辺 紘良	(前 掲 出) (//) 宋代地主制の研究	(前 掲 出) (//) 独協医科大学助教授	1,080	
47	長 正 統 川崎 信定 二瓶 幸子 土肥 祐子	(前 掲 出) (//) アティーシャ著「菩提前燈論」の研究 宋代における市舶制度の展開	(前 掲 出) (//) 日本学士院事務官	1,218	4.1-6.30 10.1-3.31

年度	研究者氏名	研 究 課 題	現 職	補助金 年 額 (千円)	備 考
48	菅野 裕臣 松 本 明 花田 宇秋	朝鮮語の歴史的研究 唐代選挙制度の研究 イスラーム第二次内乱の研究	東京外国語大学助 教授 財団法人東洋文庫 専任研究員 中央大学講師	1,620	
49	菅野 裕臣 松 本 明 花田 宇秋	(前 掲 出) (//) (//)	(前 掲 出) (//) (//)	1,620	
50	松 本 明 花田 宇秋 長野 泰彦	(前 掲 出) (//) ボン教の伝承に関する文献学的 研究	(前 掲 出) (//) 国立民族学博物館 助手	2,700	
51	長野 泰彦 古垣 光一 志茂 碩敏	(前 掲 出) 宋代官僚制の研究 Gha Zan Khān の諸改革	(前 掲 出)	3,024	
52	長野 泰彦 原 田 覺 古垣 光一 佐藤 智水 浜下 武志	(前 掲 出) 吐蕃仏教の研究 (前 掲 出) 南北朝・随・唐初における呂義 について 中国近代経済史研究—金融問題 を中心として—	(前 掲 出) 岡山大学専任講師 一橋大学専任講師	3,240	4.1-9.15 9.16-3.31 4.1-11.30 12.1-3.31
53	原 田 覺 浜下 武志 部 勇 造	(前 掲 出) (//) 古代南アラビア史のクロノロジ ーの研究	(前 掲 出) 東京大学助手	3,492	
54	原 田 覺 並木 頼寿 新村 容子	(前 掲 出) 捻軍史を中心とする清末革北農 村社会の研究 清末地主制の研究		3,636	

V 役 職 員 名 簿

昭和55年3月31日現在の財団法人東洋文庫の役職員は、以下のとおりである。

1. 役 員

役 職 名	氏 名	現 職
理事長代理 専務理事	榎 一 雄	国立国会図書館支部東洋文庫長 財団法人東洋文庫研究部長 財団法人東洋文庫図書部長 東京大学名誉教授
理 事	有 光 次 郎	日本芸術院院長 東京家政大学学長
〃	小笠原 光 雄	株式会社三菱銀行相談役
〃	川 北 禎 一	株式会社日本興業銀行相談役
〃	河 野 六 郎	大東文化大学教授 財団法人東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター所長
〃	酒 井 杏之助	株式会社第一勧業銀行相談役
〃	高 垣 寅次郎	日本学士院会員 一橋大学名誉教授 成城学園名誉園長
〃	徳 川 宗 敬	神社本庁統理 社団法人日本博物館協会会長
〃	松 本 重 治	財団法人国際文化会館理事長
〃	山 本 達 郎	日本学士院会員 国際基督教大学教授 東京大学名誉教授
監 事	中 島 正 樹	株式会社三菱総合研究所会長 社団法人経済団体連合会評議員 経済同友会幹事
評 議 員	石 川 忠 雄	慶応義塾塾長 慶応義塾大学学長
〃	梅 原 末 治	京都大学名誉教授
〃	坂 本 太 郎	日本学士院会員 国学院大学教授 東京大学名誉教授
〃	沢 田 敏 男	京都大学学長
〃	清 水 司	早稲田大学総長
〃	中 山 素 平	株式会社日本興業銀行相談役
〃	長谷川 周 重	住友化学工業株式会社会長
〃	俣 野 健 輔	飯野海運株式会社会長
〃	向 坊 隆	東京大学総長

2. 東洋学連絡委員会委員

役 職 名	氏 名	現 職
委 員 長	榎 一 雄	(前掲出)
常 任 委 員	山 本 達 郎	(前掲出)
委 員	市 古 宙 三	中央大学教授, お茶の水女子大学名誉教授
〃	岩 生 成 一	日本学士院会員
〃	植 村 清 二	(前掲出)
〃	江 上 波 夫	古代オリエント博物館館長 東京大学名誉教授
〃	貝 塚 茂 樹	京都大学名誉教授
〃	長 尾 雅 人	鉄鋼短期大学教授 京都大学名誉教授
〃	中 嶋 敏	大東文化大学教授, 東京教育大学名誉教授
〃	日比野 丈 夫	大手前女子大学教授, 京都大学名誉教授
〃	福 井 康 順	早稲田大学名誉教授
〃	松 本 信 廣	慶応義塾大学講師 慶応義塾大学名誉教授
〃	宮 崎 市 定	京都大学名誉教授
〃	森 鹿 三	仏教大学教授 京都大学名誉教授
〃	吉 川 幸次郎	日本芸術院会員 京都大学名誉教授

3. 名誉研究員

氏 名	現 職
W. T. デ・バリイ	コロンビア大学教授
W. フ ッ ク ス	前ケルン大学教授
E. O. ライシャワー	ハーヴァード大学教授, 元駐日アメリカ大使
W. サ イ モ ン	イギリス学士院会員, ロンドン大学名誉教授
G. ト ウ ッ チ	ローマ大学教授, イタリア中東亜研究所所長
A. フォン・ガペイン	前ハンブルグ大学教授
A. B. デ ォ ヴ ィ ス	シドニー大学教授
J. ゼ ル ネ	第7パリ大学教授, フランス国立高等研究院研究指導員
H. フ ラ ン ケ	ミュンヘン大学教授
L. ペ テ ッ ク	ローマ大学教授

4. 職 員

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	部 長	榎 一 雄	(前掲出)
	部 長 代 理	護 雅 夫	東京大学教授
	部 長 補 佐	田 中 正 俊	東京大学教授
	研 究 顧 問	岩 村 忍 郎	京都大学名誉教授
	〃	村 田 治 郎	京都大学名誉教授
	研究員(兼任)	青 山 定 雄	聖心女子大学講師
	〃	荒 松 雄	東京大学東洋文化研究所教授
	〃	池 田 温	東京大学東洋文化研究所教授
	〃	市 古 宙 三	(前掲出)
	〃	岩 生 成 一	(前掲出)
	〃	宇都木 章	青山学院大学教授
	〃	梅 原 末 治	(前掲出)
	〃	海 野 一 隆	(前掲出)
	〃	岡 田 英 弘	東京外国語大学アジア・フリカ言語文化研究所教授
	〃	越 智 重 明	九州大学教授
	〃	亀 井 孝 孝	成城大学教授
	〃	川 崎 信 定	筑波大学助教授
	〃	神 田 信 夫	明治大学教授
	〃	菊 池 英 夫	北海道大学教授
	〃	北 村 甫	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
	〃	草 野 靖	熊本大学教授
	〃	河 野 六 郎	(前掲出)
	〃	後 藤 明	山形大学助教授
	〃	後 藤 均 平	立教大学教授
	〃	佐 伯 富	京都大学名誉教授
	〃	酒 井 憲 二	図書館情報大学教授
	〃	佐 藤 次 高	(前掲出)
	〃	滋 賀 秀 三	東京大学教授
	〃	斯 波 義 信	(前掲出)
	〃	清 水 宏 祐	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
	〃	末 松 保 和	学習院大学名誉教授
	〃	周 藤 吉 之	東洋大学講師
	〃	関 野 雄	お茶の水女子大学教授
	〃	田 川 孝 三	日本大学講師

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(兼任)	田 中 時 彦	東海大学教授
	〃	田 中 正 俊	(前掲出)
	〃	竺 沙 雅 章	京都大学助教授
	〃	鶴 見 尚 弘	横浜国立大学教授
	〃	土 肥 義 和	国学院大学助教授
	〃	鳥 海 靖 敏	東京大学助教授
	〃	中 嶋 敏	(前掲出)
	〃	永 田 雄 三	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
	〃	原 實	(前掲出)
	〃	坂 野 正 高	国際基督教大学教授
	〃	藤 枝 晃 見	京都大学名誉教授
	〃	松 濤 誠 達	大正大学講師
	〃	松 村 潤	日本大学教授
	〃	松 本 信 廣	慶応義塾大学名誉教授
	〃	三根谷 徹	東京大学教授
	〃	護 雅 夫	(前掲出)
	〃	山 口 瑞 鳳	東京大学助教授
	〃	山 崎 元 一	国学院大学教授
	〃	山 根 幸 夫	東京女子大学教授
	〃	山 本 達 郎	(前掲出)
	〃	渡 辺 紘 良	独協医科大学助教授
図書部	研 究 員	河 鱈 源 治	
	研究員(専任)	松 本 明 子	
	研 究 助 手	大 嶋 立 子	
	部 長	榎 一 雄*	
	主 査	中 島 正 之*, 森 岡 康*, 渡 辺 兼 庸*	
総務部	副 主 査	大 塚 祐 子, 小 山 勲*, 竹之内 信 子*	
	〃	児 野 寿 満子, 秩 父 良 子	
	係 員	浅 野 千 秋, 池 田 直 人, 小 林 輝 男*	
	〃	西 蘭 一 男	
	部 課 係	早 船 艶 雄	
総務部	長 員	平 野 豊	
	〃	稻 村 優, 宇田川 善 吉, 染 谷 コ ウ*	
	〃	高 木 美智子, 光 田 憲 雄, 谷 治 嘉 紀	

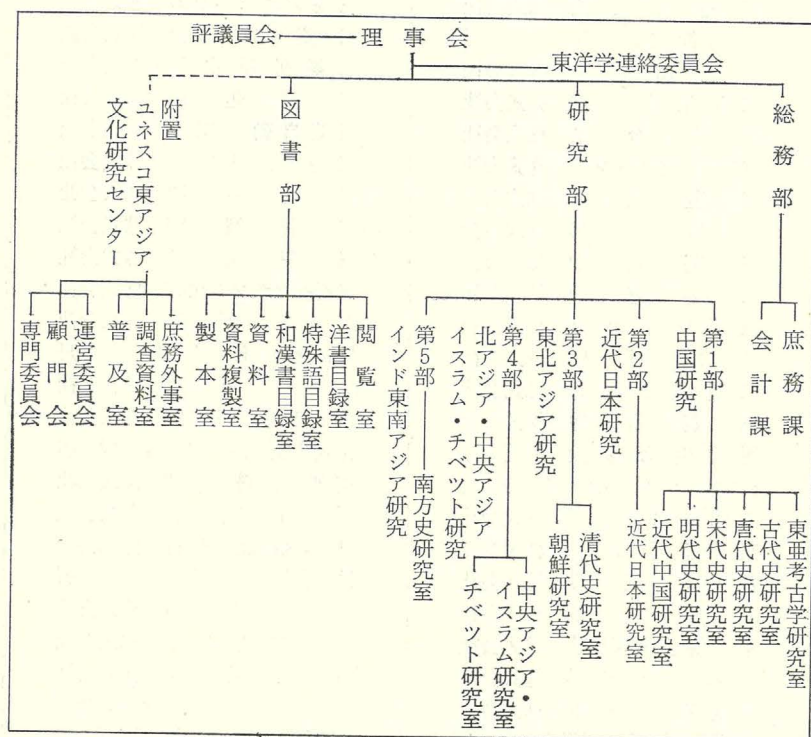
* 印は国立国会図書館支部東洋文庫職員

5. 臨時職員

部 名	氏 名
研 究 部	飯田隆子, 大井 剛, 大西澄子, 小野尚美, 久保恵子, 熊谷哲也, 小牧昌平, 笹川陽子, 佐々木淑子, 志茂碩敏, 花田宇秋, 福田明枝, 船津和幸, 古垣光一, 山名弘史,
図 書 部	仙波志津枝, 堂前敏昭, 武藤 淳, 森川孝典, 渡辺 修

(昭和54年4月1日～昭和55年3月31日間に在籍した者)

財 団 法 人 東 洋 文 庫 組 織 図



VI 東洋文庫維持会

本維持会は、財団法人東洋文庫の事業を援助発展させることを目的として結成されたもので、現在の会員は下記の通り45社である。会員には普通会員(個人)、賛助会員(個人又は法人団体)、及び特別会員があり、特別会員を除き年会費(普通会員1口5千円以上、賛助会員1口50千円以上)を納入する。

東洋文庫維持会会員名簿

三菱重工業株式会社	三菱アルミニウム株式会社
株式会社三菱銀行	三菱化工機株式会社
旭硝子株式会社	三菱瓦斯化学株式会社
三菱化成工業株式会社	三菱建設株式会社
三菱金属株式会社	三菱自動車工業株式会社
三菱鉱業セメント株式会社	三菱自動車販売株式会社
三菱地所株式会社	三菱樹脂株式会社
三菱商事株式会社	三菱製鋼株式会社
三菱石油株式会社	三菱製紙株式会社
三菱電機株式会社	三菱モンサント化成株式会社
三菱レイヨン株式会社	三菱油化株式会社
日本郵船株式会社	株式会社伊勢丹
三菱信託銀行株式会社	エーザイ株式会社
三菱倉庫株式会社	小田急電鉄株式会社
明治生命保険相互会社	株式会社西武百貨店
株式会社竹中工務店	東亜燃料工業株式会社
千代田化工建設株式会社	戸田建設株式会社
東京急行電鉄株式会社	日本信託銀行株式会社
日興証券株式会社	株式会社日立製作所
麒麟麦酒株式会社	富士紡績株式会社
東京海上火災保険株式会社	本田技研工業株式会社
日本光学工業株式会社	精工産業株式会社
三菱アセテート株式会社	計45社

(昭和55年3月31日現在 敬称略・順不同)

VII 財団法人東洋文庫附置

ユネスコ東アジア文化研究センター事業

1. 調査研究事業

1-A. 長期調査研究「アジアの文化価値とその現代的条件への適応」

【年度】 10ヶ年計画第5年度

【概要】 本計画は、本来センターがユネスコ本部に提案し、1974（昭和49）年の第18回ユネスコ総会で採択された研究計画である。この計画実施のために1976（昭和51）年3月に、センターが受入機関となって東京で開催された「アジア地域文化研究機関代表者会議」の決議に基づいて、各国で調査研究が進められているが、センターでは、本年度、次の四つの研究テーマによる調査研究を実施した。

1-A-1. 「アジアの伝統文化における理想像——年中行事と生涯行事の分析——」（5年計画第4年度）

【概要】 アジア諸民族のもつユートピア思想を、主として実地調査に基づき、各種の行事や儀式の調査・分析を通じて探究することを目的としている。

【専門委員】 中根千枝（委員長）、伊藤亜人、内堀基光、梶原景昭、関本照夫、田村克己、柳川啓一。

【事業内容】

研究会

5月29日：内堀基光「イバン族の宗教経験の一側面」

6月27日：関本照夫「ジャワ農村の宗教生活」

9月25日：柳川啓一「ハワイにおける日本仏教」

12月15日：梶原景昭「都市の祝祭——ペラヘラの象徴性——」

2月5日：清水 展「フィリピン・ネグリート族の儀礼と社会」

海外実地調査 (1)

調査地：スリランカ

調査者：梶原景昭

調査期間：昭和54年7月10日～8月28日

調査目的：コロンボを中心とする仏教儀礼と巡礼に関する実地調査

海外実地調査 (2)

調査地：韓国・タイ・インドネシア・フィリピン

調査者：柳川啓一

調査期間：昭和55年3月29日～5月17日

調査目的：各国における新宗教の動態に関する比較実地調査

1-A-2. 「アジア諸文化の特色」(5年計画第3年度)

【概要】 日本を含むアジア各地の伝統的芸術・芸能等の文化遺産の現状及び由来を調査し、それらの現代における意味を探ると同時に、それらの比較研究を行なうために必要な概念を分析・整理することを目的としている。

【専門委員】 小泉文夫(委員長)、河竹登志夫、田口安男、前野 堯、松村禎三。

【事業内容】

研究会

5月24日：武満 徹「武満音楽の系譜と日本現代音楽」

9月3日：松村禎三「松村音楽と映像」

11月29日：河竹登志夫「世界における歌舞伎の位置」

1月22日：田口安男「絵画と道具」

その他

事業に必要な関係資料(書籍・レコード・16mmフィルム等)を整備した。

1-A-3. 「アジア諸国における国民統合の理念とその機能」(5年計画初年度)

【概要】 流動しつづけるアジア諸国において、国民を統合するための理念が形成される契機及びその内容、実際の機能のしかたを明らかにすることを目的とし、主として社会科学的観点から研究を進める。

【事業内容】 衛藤清吉東京大学教授を中心とする専門家会議を、11月27日および2月26日に開催して、専門委員の人選と、事業計画について検討した。

1-A-4. 「現代アジア諸国におけるマスコミュニケーションと大衆文化」(5年計画初年度)

【概要】 アジア諸国において、各国の文化的価値観の形成に重要な役割をもつラジオ・新聞・テレビ・雑誌などのマスコミュニケーションが、実際に大衆文化にいかなる要素を送りこんでいるかを明らかにすることを目的とし、主として人文科学的研究をおこなう。

【専門委員】 辻村 明(委員長)、伊藤慎一、岩男寿美子、岡部慶三、佐田一彦。

【事業内容】

11月7日：事業計画に関する討議のための専門家会議

12月5日：辻村 明「ボンベイのマスコミ関係会議(11月)の報告」

3月18日：山口秀夫「アジアのラジオ・テレビの実情」

岩男寿美子「アジア諸国におけるマスコミ研究者」

1-B. 一般調査研究

1-B-1. 「東アジア文化研究」

【概要】 東アジア文化の形成に欠くことのできない要素としての「青銅器文化」と「稲作文化」に注目し、資料の収集・整理と共に調査研究を進めることを目的としている。

1-B-1-a. 「東アジアの青銅器文化」(4年計画第3年度)

【事業内容】

昨年度にひきつづき、梅原末治氏収集の、日本および中国の青銅器資料の整理を継続した。

1-B-1-b. 「東アジアの稲作文化」(5年計画第2年度)

【事業内容】

専門家会議

12月21日：渡部忠世氏(京都大学東南アジア研究センター所長)を中心とする事業計画会議。

実地調査等

1月6～7日：高崎市の弥生前期浜川遺跡の見学・討議(渡部忠世・大林太良・高谷好一・生田 滋)。

3月25～31日：沖縄諸島の稲作文化の予備的調査(飯島 茂, 高谷紀夫, 生田 滋)。
資料の整備等

- (1) 日本の稲作地域の研究のための視覚的資料として、5万分の1の地図の上に地理学・農業学的情報および、民俗・民話モチーフの分布を記入し、今後に備えた。
- (2) 昨年度にひきつづき、アジア諸地域の地形図・地質図及び書籍を購入した。地形図は、タイ、インド、パキスタン、バングラデシュ、香港、スリランカ、シンガポール、その他アジア地域全般にわたるもの、合計520枚にのぼり、昨年度購入したものを併せると1,300枚をこえる。

1-B-2. 「アジア地域における文化研究機関の実態とその活動に関する調査」(4年計画初年度)

【概要】 アジア諸国の文化研究機関の活動の実態を知ること、地域研究の拡充、国際協力の充実強化のための基礎的な条件である。そのため、アンケート調査等を通じて得た情報を英文で公開することを目的としている。

【事業内容】

日本における文化研究機関の実態調査に際し、とくに日本に来る外国人学生・研究者にとって如何なる情報が必要かを11月22日、3月8日、3月15日の3回にわたる専

門家会議で検討し、アンケート調査に着手した。

1—C. 特別調査研究「現代アジアの社会的、文化的環境の現状に関する基礎的調査」（7年計画初年度）

【概要】 この特別調査研究は、アジア諸国の文化・社会について実験的で、かつ総合的な方法を採用しながら、アジア地域が共通にもっている特質を研究し、アジア地域の実情の把握につとめようとするものである。

1-C-1. 「アジア諸国におけるエリートに関する社会科学的総合調査」

【事業内容】

3月25日：専門家会議で阿部 洋氏の「中国における人材養成と海外留学——アメリカ留学の『遺産』と現在」と題する発表をもとに討議し、また、今後の事業計画等を検討した。

そのほか、関係する基礎的文献を収集した。

1-C-2. 「アジア諸国における大衆文化——特に口碑伝承の調査——」

【事業内容】

1月14日：専門家会議で内堀基光氏の「イバン族の口碑伝承」と題する発表にもとづいて討論し、また今後の事業計画について検討した。

そのほか、関係する基礎的文献を収集した。

2. 学術交流及び普及、ドキュメンテーション活動

2—A. 学術交流

2-A-1. 研究者および職員の海外派遣・出張（日付順）

生田 滋：54年6月19日——6月25日、インドのランチで開催されたユネスコ主催の「アジア諸国における文化研究機関の活動会議」に出席のためインドへ派遣した。

また、54年7月23日——7月27日、クアラルンプールで開催された国際公文書館会議主催の「アジア諸国における文書館所蔵資料ガイドブック編集のための国際会議」への出席および今後の研究事業に必要なネットワーク形成準備のため東南アジア諸国に派遣した。

梶原景昭：54年7月10日——8月28日、上記1-A-1参照。

梅村 坦：54年9月4日——17日，中華人民共和国へ，博物館，大学，研究所等との資料および情報交換のため派遣した。

志茂碩敏：54年11月26日——55年1月9日，ペルシア語資料・文献の調査，収集のため，テヘランへ派遣した（下記2-C参照）。

柳川啓一：55年3月29日——5月17日，上記1-A-1参照。

2-A-2. 外国人研究者，各種専門家に対する便宜供与

本年度，センターを訪れ，センターが便宜供与した外国人研究者は次のとおり。

Prof. Tham Seong Chee	Professor, Department of Malay Studies, University of Singapore
Prof. S. J. Chen	Professor, Department of Malay Studies, University of Singapore
Ms. Macharee Wonghanchao	Information Specialist, Thailand Information Centre, Chulalongkorn University, Bangkok
Prof. Le Van Phuc	Visiting Professor, Osaka University of Foreign Studies
Prof. Trinh Ho Khoa	Visiting Professor, Tokyo University of Foreign Studies
Mr. Nguyen Thanh Vinh	Second Secretary, Embassy of Vietnam, Tokyo
Prof. Whang Won-Koo	Vice-Director, Institute of Korean Studies, Yonsei University, Seoul
Ms. Szabó Viktória	Student, Eötvös-Loránd-University, Budapest
Prof. Lothar Knauth	Professor Titular, Facultad de Filosofía y Letras, Colegio de Historia, Universidad Nacional Autónoma de México
Dr. Kim Dong-uk	Professor, College of Liberal Arts, Yonsei University, Seoul
Dr. P. K. Yu	Director, Center for Chinese Research Materials, Association of Research Libraries, Washington, D.C.
Dr. Tsuen-Hsuei Tsien	Professor Emeritus, The University of Chicago; Curator Emeritus, Far Eastern Library, The University of Chicago
Mr. Qubad Afchar	Researcher in philology, Teheran
Dr. Yogesh Atal	Unesco Regional Adviser for Social Sciences

	in Asia and Oceania, Bangkok
Mr. Ng Peng Kong	Secretary General, Malaysian National Commission for Unesco, Kuala Lumpur
Ms. Sophie Clement-Charpentier	Researcher, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, Paris
Mr. Pierre Clement	Researcher, Centre d'Etudes et de Recherches Architecturales, Paris
Mr. Herve Denes	Researcher, Comité du Film Ethnographique, Musée de l'Homme, Paris
Mr. Mir Nasrullah	Additional Secretary, Ministry of Education and Culture, New Delhi
Mr. Witit Sujjapong	Student, Hitotsubashi University, Tokyo
Ms. Chua Ser-kun	Japan Foundation Ph.D. Candidate Fellow, Nanyang University, Singapore
Mr. Udom Warotamasikkhadit	Vice-Rector and Professor, Ramkhamhaeng University, Bangkok

2-B. 文献目録等の作成

2-B-1. 「日本における近代中国研究の現状」調査

【連絡委員】 市古宙三(代表), 安藤彦太郎, 今堀誠二, 衛藤藩吉, 川勝 守, 河地重蔵, 菊池英夫, 鈴木中正, 田中正俊, 藤本 昭, 堀川哲男, 山田辰男。

【事業内容】 例年通り, アンケート方式により国内の近代中国研究者の姓名, 住所, 現職, 専門領域, 業績の調査をおこない, カード化した。このカードは東洋文庫近代中国研究室参考図書室で研究者への便に供されているほか, ロンドンの China Quartary に送付されたいうで, そのリスト刊行に利用されている。そのほか, 今年度は, 従来のこの調査結果を利用した『近代中国関係文献目録』(同刊行委員会——代表者市古宙三)の編集にあたり, これは55年2月に中央公論美術出版より刊行された。これらの事業のため, 8月29日及び3月28日にそれぞれ編集会議, 連絡会議を開催した。

2-B-2. 「日本における中央アジア研究文献目録」の編集(5年計画第2年度)

昨年度に引き続き, 日本人による中央アジア関係の研究文献目録の編集にあたり, 基礎カードの作成をすすめた。また, 10月29日, 3月12日に専門家会議を開催して情報の集約につとめたほか, 後者では百橋明穂氏の「日本における中央アジア美術史研究の流れ」と題する発表をもとに討議をもおこなった。

2-B-3. 「日本におけるアジア（含日本）研究者一覧」の編集

下記3-Dのシリーズ完成に付随すべきものとして、ひきつづき編集を進めた。

2-B-4. 「日本における東洋学の回顧と展望」（英文）の編集

新たに2点の編集を完了し、刊行した。下記3-Dを参照。

2-C. 資料の調査・収集および整理

本事業は、アジア諸国においてアジア諸言語によって書かれたアジアの社会・文化・歴史に関する学術書・学術雑誌等の刊行物の出版状況を調査して情報を収集するほか、今後のアジア研究に必要な書籍・定期刊行物・文献などを収集し整理することを目的としている。ここ数年来、とくに世界の注目の的となっている中東の研究に関するアラビア語・トルコ語・ペルシア語文献の調査・収集を進めてきている。

本年度は、東洋文庫研究員の志茂碩敏氏をテヘランに派遣し、イラン革命さなかに於ける活発な出版状況を調査したほか、約530冊のペルシア語文献を購入した。

なお、昨年度整理したペルシア語マイクロフィルム及び東洋文庫所蔵のトルコ語マイクロフィルムの焼付けをおこない、整理の準備をすすめた。

2-D. 語学講習会の開催

ベトナム語講習会

期間：昭和54年7月23日(月)―8月31日(金) 毎週月曜日から金曜日 午前9時より正午まで

会場：慶応義塾大学（三田校舎）

講師：川本邦衛，チンニホニホア，レニヴァンニフック

修了者：18名

2-E. 図書の寄贈及び交換

本年度も従来どおり、センターの出版物を国内の大学、研究所、在日各国公館など約200個所、国外の大学、研究所、国際的機関など約300個所に定期的に寄贈した。また国内の研究機関約50個所、国外の研究機関約100個所から定期的に出版物の寄贈をうけた。

3. 出版物の作成

3-A. 機関誌 East Asian Cultural Studies の刊行

本年度は、Vol. XIX, Nos. 1-4合併号（100ページ）を刊行した。内容は、53年度

に終了した「世界における東洋学の現状調査」の中の「東アジア諸国における自国研究ならびにアジア研究の現状調査」のうち、51年度のタイ、52年度のマレーシア、53年度のインドネシア及びシンガポールに関する報告書である。タイトル及び目次は下記のとおりである。

Oriental and Asian Studies in the Contemporary World: Problems and Trends

Preface, by Masao Mori

Thai Studies in Transition: A Report on Origins, Problems, and Trends, by
Srisakra Vallibhotama

Report on Malaysian and Southeast Asian Studies: Origins, Issues, and Trends,
by Lee Poh Ping

Asian Studies in Indonesia in the 1970s, by A. B. Lopian

The Social Sciences in Singapore: Some Emerging Trends in Research, by Jon
S. T. Quah

3—B. アジア史料叢刊（英文）

52年度に刊行した『ラーマー世年代記』第1巻一本文篇一につづく、第2巻註釈篇の編集を進め、また、チャンニヴァン・ザップ著、グエンニカクニカム翻訳『ベトナム書誌』の英文編集を継続しておこなった。

3—C. 東アジア文化研究叢書（英文）

本年度は、このシリーズの No. 20 として、金 東旭著、レオンニハーヴィッツ訳『朝鮮文学史』（英文 History of Korean Literature, written by Kim Donguk, translated by Leon Hurvitz）、321ページを刊行した。

目次は下記のとおり。

Foreword

Note

Introduction

Chapter I. Ancient Literature

Chapter II. Mediaeval Literature

Chapter III. Early Modern Literature

Chapter IV. Modern Literature

Final Chapter. The Characteristics of Korean Literature

Appendix

Notes

3—D. 文献目録の出版

『日本における東洋学の回顧と展望——1963～1972——』（英文 Oriental Studies in

Japan: Retrospect and Prospect, 1963～1972) を2点刊行した。

Part I-2. 田村芳朗「日本仏教」Japanese Buddhism, 15ページ。

Part II-18. 生田 滋「東南アジア史」History of Southeast Asia, 17ページ。

4. 業 務 報 告

A. 運営委員会・顧問会議

運営委員会

前期 開催日 昭和54年5月29日(火)

- 報告 1. 昭和53年度事業報告及び決算報告について
2. 人事について

- 議題 1. 昭和54年度事業計画案及び予算案について
2. 運営委員及び顧問の改選について

後期 開催日 昭和54年11月6日(火)

- 報告 1. 昭和54年度事業及び会計中間報告について
議題 1. 昭和55年度概算要求について

顧問会議

開催日 昭和54年5月29日(火)

- 報告 1. 昭和53年度事業報告及び決算報告について
2. 人事について

- 議題 1. 昭和54年度事業計画案及び予算案について
2. 運営委員及び顧問の改選について

B. 役員異動

異動月日	役職名	氏名	就退区分	備考
54. 6. 30	顧問	都留重人	退任	一橋大学名誉教授
54. 8. 17	運営委員	小山田隆	〃	前国際交流基金専務理事
54. 8. 18	〃	伊達邦美	就任	国際交流基金専務理事
54. 11. 27	所長	榎一雄	退任	
〃	運営委員	河野六郎	〃	大東文化大学教授 財団法人東洋文庫理事
54. 11. 28	所長	河野六郎	就任	
55. 3. 31	運営委員	石田雄	退任	東京大学社会科学研究所所長
〃	〃	深井晋司	〃	東京大学東洋文化研究所所長
〃	〃	河野健二	〃	京都大学人文科学研究所所長

C. 職員異動

異動月日	職名	氏名	就退区分	備考
54. 4. 30	研究助手	清水敏江	退職	
54. 5. 1	〃	坂本葉子	就職	
54. 9. 30	専門員	Helen Hardacre	退職	
54. 10. 1	〃	William Dean Kinzley	就職	
55. 3. 31	研究助手	広瀬洋子	退職	

D. 受賞

年月日	役職名	氏名	区分	備考
52. 11. 3	運営委員	中村元	選任	文化勲章
53. 11. 3	顧問	今日出海	〃	文化功労者
〃	運営委員	長尾雅人	叙勲	勲二等旭日重光章
〃	〃	服部四郎	〃	勲二等旭日重光章
54. 11. 3	顧問	平塚益徳	〃	勲一等瑞宝章
〃	運営委員	伊藤良二	〃	勲三等旭日中綬章

E. 表 彰

年 月 日	役 職 名	氏 名	区 分	備 考
54. 11. 19	研究助手	広 瀬 洋 子	勤 続	財団法人東洋文庫より勤続20年

F. 会 計 報 告

昭和54年度ユネスコ東アジア文化研究センター収支決算書

(昭和55年3月31日現在)

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金額(千円)	科 目	金額(千円)
民間学術研究振興費	74,491	経 常 費	48,689
国 庫 補 助 金		人 件 費	44,093
ユ ネ ス コ 援 助 金	861	事 務 費	4,596
財 産 収 入	10	事 業 費	27,550
雑 収 入	877	研 究 経 費	10,898
		長 期 調 査 研 究 費	6,089
		一 般 調 査 研 究 費	4,062
		特 別 調 査 研 究 費	747
		研究者の交流及び普及活動経費	2,480
		研究文献の収集・目録の作成・翻訳出版等経費	14,172
計	76,239	計	76,239

G. 国庫補助金年度別受入額一覧表

年度別	受 入 額	年度別	受 入 額
	千円		千円
36	10,000	46	27,177 (27,600)
37	11,000	47	30,430 (31,000)
38	12,000	48	38,636 (39,500)
39	12,571	49	49,277 (50,000)
40	12,550	50	56,079 (58,000)
41	14,257 (14,500)	51	59,845 (60,565)
42	15,622 (16,000)	52	64,864 (65,572)
43	16,700	53	70,266 (70,756)
44	21,466 (21,700)	54	74,491 (75,000)
45	24,061 (24,500)		
			() 内は当初予算額

5. 役 職 員 名 簿

昭和55年3月31日現在のユネスコ東アジア文化研究センターの役職員は以下のとおりである。

A. 所長

河 野 六 郎

副所長

護 雅 夫

B. 運営委員

氏 名	現 職
石 田 雄	東京大学社会科学研究所所長
伊 藤 良 二	ユネスコアジア文化センター理事長
岩 生 成 一	日本学士院会員
梅 棹 忠 夫	国立民族学博物館館長
岡 野 澄	東京工業高等専門学校校長
大 崎 仁	文部省学術国際局審議官
尾 高 邦 雄	東京大学名誉教授
鹿子木 昇	アジア経済研究所所長
河 野 健 二	京都大学人文科学研究所所長
菊 地 勇次郎	東京大学史料編纂所所長
北 村 甫	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所長
仙 石 敬	文部省学術国際局ユネスコ国際部長
高 田 修	国立文化財研究所名誉所員
伊 達 邦 美	国際交流基金専務理事
中 村 元	東方学院学院長
服 部 四 郎	日本学士院会員 東京大学名誉教授
深 井 晋 司	東京大学東洋文化研究所所長
福 井 康 順	早稲田大学名誉教授
前 田 陽 一	国際文化会館専務理事 東京大学名誉教授
松 本 信 広	慶応義塾大学名誉教授
山 本 達 郎	日本学士院会員 国際基督教大学教授 東京大学名誉教授
吉 川 幸次郎	日本芸術院会員 京都大学名誉教授
渡 部 忠 世	京都大学東南アジア研究センター所長

C. 顧問

氏 名	現 職
今 日出海	国際交流基金理事長
篠 沢 公 平	文部省学術国際局長 日本ユネスコ国内委員会事務総長
東 畑 精 一	東京大学名誉教授
平 塚 益 徳	日本ユネスコ国内委員会会長
前 田 充 明	城西大学名誉学長

D. 参 与

氏 名	現 職
青 山 秀 夫	京都大学名誉教授
織 田 武 雄	〃
田 村 実 造	〃
長 尾 雅 人	〃
丸 山 真 男	東京大学名誉教授
三 上 次 男	〃
宮 崎 市 定	京都大学名誉教授
宮 本 正 尊	東京大学名誉教授

E. 専門員

William Dean Kinzley

F. 職 員

職 名	氏 名
調査資料室長	生田 滋
普及室長	外池明江
庶務外事室長	松前義治
研 究 員	梅村 坦 本庄比佐子
研 究 助 手	坂本葉子 設楽靖子 広瀬洋子
係 員	直井靖夫 西山敬子

G. 臨時職員

昭和54年4月1日から昭和55年3月31日に至る間に臨時職員として在籍した者は、以下のとおりである。

石川むつみ 猪原由香 内野佳子 大井得恵 遅沢克也 片山章雄 加藤直子 川崎正子 窪田治美 田中明良 寺村伸一 中野峰子 長縄誓子 船橋和夫 森川孝典 矢野浩之 Daw Khin Yi

財団
法人 東洋文庫年報 昭和54年度

昭和55年10月31日発行	非売品
発行者	東京都文京区本駒込 2-28-21 財団法人 東洋文庫 榎 一 雄
印刷者	東京都中央区湊 2-2-4 株式会社 第一印刷所
発行所	東京都文京区本駒込 2-28-21 財団法人 東洋文庫

本書は昭和55年度財団法人東洋文庫に対する文部省補助金の一部によって刊行されたものである。

